

【表紙】

【提出書類】	有価証券届出書
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2018年8月24日
【会社名】	マネックスファイナンス株式会社
【英訳名】	Monex Finance Corporation
【代表者の役職氏名】	代表取締役 勝股 春美
【本店の所在の場所】	東京都港区赤坂一丁目12番32号
【電話番号】	03(4323)3818(代表)
【事務連絡者氏名】	管理部長 野田 朗雄
【最寄りの連絡場所】	東京都港区赤坂一丁目12番32号
【電話番号】	03(4323)3818(代表)
【事務連絡者氏名】	管理部長 野田 朗雄
【届出の対象とした売出有価証券の種類】	社債
【届出の対象とした売出金額】	マネックスグループ株式会社保証付 マネックスファイナンス株式会社2019年9月18日満期気温参照型 クーポン付円建社債（「個人向けマネックス債秋祭り」と略称す ることがある。）（以下「本社債」という。） 2,000百万円
【安定操作に関する事項】	該当事項はありません。
【縦覧に供する場所】	該当事項はありません。

第一部【証券情報】

第1【募集要項】

該当事項はありません。

第2【売出要項】

1【売出有価証券】

(1)【売出社債（売出短期社債を除く。）】

銘柄	マネックスグループ株式会社保証付マネックスファイナンス株式会社2019年9月18日満期気温参照型クーポン付円建社債（「個人向けマネックス債 秋祭り」と略称することがある。以下「本社債」という。）
記名・無記名の別	無記名式
売出券面額の総額又は売出振替社債の総額（円）	2,000百万円
各社債の金額（円）	10,000円
売出価額の総額（円）	2,000百万円
利率（％）	年0.10% + 年0.10% ×（観測期間中の観測地点における最高気温が25 以上の日数） 観測期間中の観測地点における最高気温が25 以上の日数は、気象庁ホームページ（ http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php ）で2018年10月19日午後5時において確認できる2018年10月4日から2018年10月12日の9日間の気象庁が公表する「東京都東京」の最高気温が摂氏25度以上の日数に基づいて計算代理人により計算される。 なお、上記の算式に基づき、利率は最高で年1.00%、最低で年0.10%となる。
利払日	2019年9月18日
償還期限	2019年9月18日
売出しに係る社債の所有者の住所及び氏名又は名称	東京都港区赤坂一丁目12番32号 マネックス証券株式会社（以下「売出人」という。）

(注) 1. 本社債は、マネックスファイナンス株式会社（以下「発行会社」という。）が設定した2017年9月28日付保証付きユーロ・メディアム・ターム・ノート・プログラム（以下「本プログラム」という。）に基づきユーロ市場で発行され、信金インターナショナル（Shinkin International Ltd.）がこれを引き受ける。本社債は、いかなる証券取引所にも上場されない。

2. マネックスグループ株式会社（以下「保証会社」という。）は、本社債について、発行会社及び保証会社により本社債に関して締結された2017年9月28日付の保証証書（その後随時の修正及び/又は改訂及び/又は補足を含み、以下「保証証書」という。）の条件に基づいて、保証を提供する。（以下「本保証」という。）発行会社が負担する元金及び利息の支払いにかかわる支払債務は本保証の対象となる。本保証の内容及び条件については、下記「2 売出しの条件 本社債のその他の主な要項 (17) 保証の内容及び条件」を参照のこと。

3. 本社債について、発行会社の依頼により、金融商品取引法（昭和23年法律第25号、その後の改正を含む。以下「金商法」という。）第66条の27に基づく登録を受けた信用格付業者から提供され、若しくは閲覧に供された信用格付又はかかる信用格付業者から提供され、若しくは閲覧に供される予定の信用格付はない。本プログラムについては、2017年9月28日、株式会社日本格付研究所（以下「JCR」という。）によりBBBの格付が付与されており、本有価証券届出書提出日（2018年8月24日）現在、かかる格付の変更はされていない。本プログラムに対する格付は、直ちに本プログラムに基づいて発行される個別の社債に適用されるものではない。

JCRは、金商法第66条の27に基づく登録を受けた信用格付業者（以下「登録格付業者」という。）である（登録番号：金融庁長官（格付）第1号）。

JCRの信用格付は、格付対象となる債務について約定どおり履行される確実性の程度について等級をもって示すものである。

JCRの信用格付は、債務履行の確実性の程度に関してのJCRの現時点での総合的な意見の表明であり、当該確実性の程度を完全に表示しているものではない。また、JCRの信用格付は、デフォルト率や損失の程度を予想するものではない。JCRの信用格付の評価の対象には、価格変動リスクや市場流動性リスクなど、債務履行の確実性の程度以外の事項は含まれない。

JCRの信用格付は、格付対象の発行体の業績、規制などを含む業界環境などの変化に伴い見直され、変動する。また、JCRの信用格付の付与にあたり利用した情報は、JCRが格付対象の発行体及び正確で信頼

すべき情報源から入手したものであるが、当該情報には、人為的、機械的又はその他の理由により誤りが存在する可能性がある。

本プログラムに付与する格付につき、JCRが公表する情報へのリンク先は、JCRのホームページ（<http://www.jcr.co.jp/>）の「格付一覧・金融法人」（<https://www.jcr.co.jp/ratinglist/finance/>）に掲載されている。なお、システム障害等何らかの事情により情報を入手することができない可能性がある。その場合の連絡先は以下のとおり。

JCR：電話番号 03 - 3544 - 7013

4. 本社債のその他の主要な要項については、下記「本社債のその他の主な要項」を参照のこと。

2【売出しの条件】

売出価格（円）	各社債の金額100円につき100円
申込期間	2018年9月10日から2018年9月14日まで
申込単位	10,000円
申込証拠金（円）	なし
申込受付場所	売出人の本店及び日本国内の各支店
売出しの委託を受けた者の住所及び氏名又は名称	該当事項はありません
売出しの委託契約の内容	該当事項はありません

（注）1. 本社債は、本プログラムに基づきユーロ市場において2018年9月14日に発行され、2018年9月18日に日本で受渡しが行われる。

- ユーロ市場で発行される本社債の券面総額は、2,000百万円である。
- 本社債の各申込人は、売出人の本支店において各申込人の名義で外国証券取引口座を開設しなければならない。売出人との間で行う本社債の取引に関しては、当該売出人から交付される外国証券取引口座約款に基づき、当該外国証券取引口座を通じて処理される。
- 本社債も本保証も1933年米国証券法（その後の改正を含む。以下「証券法」という。）に基づき登録されておらず、今後もその予定はない。証券法の登録義務が免除されている一定の取引において行われる場合を除き、米国内において、又は米国人（U.S. person）に対し、米国人の計算で若しくは米国人のために、本社債又は本保証の募集又は販売を行ってはならない。本段落において使用されている用語は、証券法のレギュレーションSにおいて定義された意味を有する。
- 本社債は、2018年1月1日以降、欧州経済領域のリテール投資家に対し勧誘され販売されることを企図されていない。本段落におけるリテール投資家とは、欧州連合の金融商品市場指令（Directive 2014/65/EU・その後の変更を含め、「第2次金融商品市場指令」という。）第4条第1項第11号に定義するリテール顧客（retail client）である者、（ii）欧州共同体指令（Directive 2002/92/EC・その後の変更を含む。）における顧客（customer・第2次金融商品市場指令第4条第1項第10号に定義するプロ顧客（professional client）に該当する場合を除く）である者又は（iii）欧州共同体指令（Directive 2003/71/EC・その後の変更を含む。）に定義される適格投資家（qualified investor）に該当しない者を意味する。したがって、本社債の欧州経済領域のリテール投資家に対する勧誘又は販売についてパッケージ投資商品規則（Regulation (EU) No 1286/2014、以下「パッケージ投資商品規則」という。）により要請される重要情報書類は準備されておらず、本社債の欧州経済領域のリテール投資家に対する勧誘又は販売はパッケージ投資商品規則により違法となる場合がある。

本社債のその他の主な要項

本社債は、発行会社、財務代理人である株式会社三菱UFJ銀行 ロンドン支店及びその他の代理人との間の2017年9月28日付代理人契約(その後随時の修正及び/又は改訂及び/又は補足を含み、以下、「財務代理人契約」という。)に従い、本社債に関して2017年9月28日付けで作成された捺印証書(その後随時の修正及び/又は改訂及び/又は補足を含み、以下「捺印証書」という。)及び保証証書の利益を享受するものとして発行される。財務代理人、支払代理人及び計算代理人は、財務代理人、支払代理人及び計算代理人として以下それぞれ言及される。社債権者(以下に定義する。)、本社債の利息の利息クーポン(以下「利札」という。)の所持人は、該当する財務代理人契約の条項の通知を受けたものとみなされる。財務代理人契約、捺印証書及び保証証書の写しは、支払代理人の所定事務所において閲覧することができる。

以下は、本社債のその他の主要な要項(以下「本社債要項」という。)である。

(1) 様式、額面及び所有権

本社債は、額面10,000円(以下「額面金額」という。)にて無記名式で発行される。

本社債は、それが恒久大券により表章され、関係するクリアリング・システムにより許容される限りにおいて、本社債券に記載される額面金額(10,000円)単位でのみ、取引可能である。

本社債は、利付社債であり、本社債要項に定める利息、償還及び支払基準に従う。

本社債には連続的な番号が付され、利札付きで発行される。

本社債及び利札の所有権は、交付により移転する。管轄権を有する裁判所によって命令された場合又は法律により要求された場合を除き、本社債又は利札の保有者(以下に定義する。)は、その支払期限が過ぎているか否かにかかわらず、また、その所有権、信託若しくは持分の通知、本社債上のいかなる記載若しくは本社債の盗難若しくは紛失にかかわらず、あらゆる目的においてその絶対的な所有者とみなされ、またそのように取り扱うことができ、いかなる者も保有者をそのように取り扱ったことにつき責任を負わない。

本社債要項において「社債権者」とは本社債の所持人をいい、(本社債又は利札に関して)「保有者」とは本社債又は利札の所持人をいう。

(2) 本社債及び本保証の地位

(a) 本社債の地位

本社債及びこれに関連する利札は、発行会社の無担保の債務(但し、下記(3)に服する。)を構成し、発行会社の発行する本社債及び利札は常に同順位であり、互いに優先されない。発行会社が本社債及びこれに係る利札について負う支払義務は、発行会社が現在若しくは将来において負うその他の無担保かつ非劣後の債務及び金銭債務と常に同順位である(但し、適用のある法律が例外を定める場合及び下記(3)を除く。)

(b) 本保証の地位

保証会社は、本社債及びこれに関連する利札について発行会社が支払うべきすべての金額の支払を無条件かつ取消不能なものとして保証している。かかる本保証は保証証書に含まれている。本保証は、保証会社の直接、無条件、非劣後、かつ無担保の債務であり、保証会社が現在若しくは将来において負うその他の無担保かつ非劣後の債務及び金銭債務と常に同順位である(但し、日本法が制定法上の例外を定める場合を除く。)

(3) 担保設定制限条項

本社債のうち未償還のものがある間又は利札のうち未払いのものがある間は、発行会社及び保証会社は、()関係債務(以下に定義する。)について支払われるべき金額の支払い、()関係債務についての保証に基づく支払い、又は()関係債務に関する補償若しくはそれに類する債務に基づく支払いを担保するために、発行会社、保証会社又は主要子会社(以下に定義する。)の現在又は将来の財産又は資産の全部又は一部に対して、関係債務の保有者又はその保証のために、抵当権、先取特権、質権その他の担保権を設定せず、又はそれらが残存していることを認めず、また、いかなる主要子会社に対してもこれらの行為を行わせない。但し、本社債及びレシート及び利札に従って、同時に、若しくはそれ以前に、かかる関係債務、保証若しくは補償、若しくはその他の債務について認められている若しくは残存しているものと同等の担保権、又は社債権者の特別決議により承認されるその他の担保権が設定されている場合はこの限りではない。

本社債要項において、以下の用語はそれぞれ以下に定義された意味を有する。

「連結財務諸表」とは、保証会社のいずれかの会計期間(以下に定義する。)について、国際会計基準(International Financial Reporting Standards)に従って作成された保証会社及びその連結子会社(以下に定義する。)の連結財務諸表、又は当該会計期間について監査済みの連結財務諸表が作成されている場合には、前述のとおり作成された保証会社及びその連結子会社の監査済み財務諸表をいう。

「会計期間」とは、文脈に応じて、()4月1日から翌年3月31日まで、()4月1日から同年9月30日まで、又は()10月1日から翌年3月31日まで、の期間をいう。但し、保証会社が3月31日以外の日を決算日として会計期間を変更した場合には、上記()、()及び()はそれに応じて変更されたものとみなされる。

「連結子会社」とは、保証会社の会計期間に関して、当該会計期間の連結財務諸表において連結されている子会社をいう。

「主要子会社」とは、保証会社の連結子会社のうち、()作成された直近の監査済み連結財務諸表における連結子会社であって、直近の監査済み非連結財務諸表に示される当該連結子会社の総営業収益（あるいは、当該連結子会社自体が連結財務諸表を作成している場合には、当該連結子会社の監査済み連結財務諸表に示されるその総営業収益）が、作成された直近の監査済み連結財務諸表に示される保証会社及びその連結子会社の総営業収益の10%以上であるか、又は、()作成された直近の監査済み連結財務諸表における連結子会社の、直近の監査済み非連結財務諸表に示される当該連結子会社の総資産（あるいは、当該連結子会社自体が連結財務諸表を作成している場合には、当該連結子会社の監査済み連結財務諸表に示されるその総資産）が、かかる監査済み連結財務諸表に示される保証会社及びその連結子会社の総資産の10%以上であるものをいう。

「関係債務」とは、いずれかの者が保有する、設定から1年を超える所定の満期を有する債券、ノート、社債、ディベンチャー、ローン・ストック又はその他の有価証券の形式の、あるいはそれらにより表章又は証明される債務で、以下に該当するものをいう。

- (a) 以下の(A)又は(B)のいずれかに該当すること。(A)その条件上円以外の通貨により支払いがなされるか、円以外の通貨で支払いを受ける権利を付与するものであること、又は、(B)円建てであり、当初その元本総額の50%を上回る金額が、発行会社、保証会社若しくは主要子会社により、あるいは発行会社、保証会社若しくは主要子会社の許可を得て、日本国外で販売されること。かつ、
- (b) 当面の間、日本国外のいずれかの証券取引所若しくは店頭市場又はその他の証券市場における値付け、上場又は取引若しくは売買がなされているか、企図されているか、あるいはこれらの行為が可能であること。

(4) 利息及びその他の計算

利付社債の利息

本社債は、2018年9月18日（以下「付利開始日」という。）より、その残存額面金額に対して、以下の方法で計算代理人によって計算される利率による利息を生じ、かかる利息は本社債の償還期限に後払いで支払われる。

利率：年0.10% + 年0.10% × (観測期間中の観測地点における最高気温が摂氏25度以上の日数)

観測期間：2018年10月4日から2018年10月12日の9日間

観測地点：気象庁ホームページ (<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>) において、「東京都東京」と定められる地点

最高気温が摂氏25度以上の日：2018年10月19日午後5時時点において気象庁ホームページ

(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>) で確認できる、観測期間中の観測地点における最高気温が摂氏25度以上の日

最高気温が25度以上の日数：気象庁ホームページ (<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>) で2018年10月19日午後5時において確認できる観測期間中の観測地点における最高気温が摂氏25度以上の日数に基づいて計算代理人により計算される日数

計算結果公表場所：マネックス証券ホームページ (<https://www.monex.co.jp/>)

計算結果公表日：2018年10月19日

計算代理人：マネックスファイナンス株式会社

但し、計算代理人が、2018年10月19日午後5時時点において、観測期間中の観測地点における最高気温が摂氏25度以上の日数を決定することができないときは、当該日数は3とするものとする。

上記方法で計算代理人によって計算される利率の最高利率は、年1.00%、最低利率は、年0.10%である。

利息発生期間について、本社債について計算金額（10,000円をいう。以下同じ。）毎に支払われる利息の金額は、利率、計算金額及び利息発生期間に関する日数調整係数の積である。利息期間が2以上の利息発生期間から成る場合、当該利息期間に関して計算金額毎に支払われる利息金額は、各利息発生期間に関して支払われる利息額の合計に等しいものとする。利息の計算が必要なその他の期間に関して支払われる利息金額は、日数調整係数については当該期間に関するものが適用されるほか上記条項が適用される。

「利息発生期間」とは、付利開始日（当日を含む。）から当初の利払日（当日を含まない。）までの期間及びその後において当該利払日から次の利払日までの期間をいう。

「日数調整係数」とは、一定の期間（当該期間の初日は含み、最終日は含まない。以下「計算期間」という。）における利息額の計算に関して、以下の計算式により計算期間中の日数を360日で除した数をいう。

$$\text{「日数調整係数」} = \frac{(360 \times (Y2 - Y1)) + (30 \times (M2 - M1)) + (D2 - D1)}{360}$$

上記計算式において、

「Y1」とは、計算期間の初日を含む年を数字で表記したものをいう。

「Y2」とは、計算期間に含まれる最終日の直後の日を含む年を数字で表記したものをいう。

「M1」とは、計算期間の初日を含む暦月を数字で表記したものをいう。

「M2」とは、計算期間に含まれる最終日の直後の日を含む暦月を数字で表記したものをいう。

「D1」とは、計算期間の最初の暦日を数字で表記したものをいう。ただし、当該数字が31である場合には、30とする。

「D2」とは、計算期間に含まれる最終日の直後の暦日を数字で表記したものをいう。ただし、当該数字が31である場合には、30とする。

利息は、本社債が償還される日に発生を停止する。但し、適法な提示がなされたにも拘わらず、支払いが不適切に留保又は遅延された場合には、利息は（判決の前後問わず）本社債要項（4）の定めに従い、残存金額が満額支払われる日まで発生する。

計算代理人による利息の決定及び利息金額の計算は、明白な誤りがある場合を除き、最終的なものとして、すべての当事者を拘束する。

(5) 利息の金額の決定

計算代理人が利率を決定したときは、利息の金額を計算し、当該金額を、発行会社、財務代理人、支払代理人、社債権者に通知する。計算代理人による利率の決定及び利息金額の計算は、明確な誤りがある場合を除き、最終的なものとして、すべての当事者を拘束する。

(6) 計算代理人

発行会社は、本社債が償還されるまで、常に1又はそれ以上の計算代理人を確保する。計算代理人が自身の義務を実行することができない場合は、発行会社は、当該計算代理人が行っている業務に密接に関連している1又はそれ以上の者を選任し、当該業務を行わせる。計算代理人は、後任者が選任されない限り、自身の義務を放棄することはできない。

(7) 償還及び買入れ

(a) 最終償還

本社債要項(7)の規定により早期に償還、買入れ又は消却が行われていない限り、本社債は、2019年9月18日（以下「満期日」という。）に、その額面金額で償還される。

(b) 期限前償還

本社債要項(7)(c)による償還において、又は本社債要項(11)に規定する支払期日が到来した場合において本社債について支払われるべき期限前償還金額は、本社債券に別途記載がない限り、満期償還金額とする。

(c) 税制上の理由による償還

本社債は、（ ）日本国、その課税目的公共団体若しくは税務当局の法令の変更若しくは改正、又はかかる法令の適用若しくは公式解釈の変更（本社債の最初のランシェを発行することについて合意がなされた日付以降に効力を生じる変更若しくは改正をいう。）の結果、発行会社（又は保証会社）が本社債要項(9)に規定又は参照される追加額を支払う義務を現在若しくは将来において負うこととなり、かつ（ ）かかる義務が、発行会社（又は（場合により）保証会社）がとり得る合理的な措置を講じても避けることのできないものである場合、発行会社の選択により期限前償還金額（本社債要項(7)(b)に記載）により（償還日までに生じた利息を付して）、社債権者に対して60日前以降かつ30日前までの通知（かかる通知は撤回不能とする。）を行った上で、いつでも、その全部を償還することができる（一部のみを償還することはできない。）。但し、かかる償還通知は、本社債の支払いが期日を迎えたと仮定した場合において発行会社（又は（場合により）保証会社）が当該追加額を支払う義務を負うこととなる最も早い日より90日前の日以前に交付してはならない。本項に従って償還通知を発行する前に、発行会社（又は（場合により）保証会社）は財務代理人に対して、発行会社が当該償還を行う権限を有する旨を記載し、当該償還を行う発行会社の権利に係る前提条件が満たされていることを証明する事実が記載された発行会社（及び/又は（場合により）保証会社）の代表取締役の署名ある証明書、並びに上記の変更又は改正の結果、発行会社（及び/又は（場合により）保証会社）が現在又は将来において当該追加額を支払う義務を負う旨の、定評のある独立した法律顧問が作成した意見書を交付するものとする。

(d) 買入れ

発行会社、保証会社及び保証会社の子会社は、公開市場その他において、随時いかなる価格でも本社債を買い入れることができる。但し、本社債に関連する、期限未到来の利札が全て、本社債に付されているか、本社債と共に提出されることを条件とする。

(e) 消却

発行会社、保証会社及び保証会社の子会社がいずれか、あるいは発行会社、保証会社及び保証会社の子会社を代理して買入れられた本社債は全て、期限未到来の全ての利札と共に、財務代理人に消却目的で提出することができ、この場合、発行会社が償還する全ての本社債と共に、（本社債に付されているか、本社債と共に提出される期限未到来の全ての利札と共に）即時に消却されるものとする。前記のとおり消却のために提出された本社債は、これを再発行又は再販売することができず、かかる本社債に関する発行会社及び保証会社の義務は免責される。

(8) 支払い

(a) 本社債

本社債の元本及び利息の支払いは、以下に従うことを条件として、米国外に所在する支払代理人の所定営業所において、本社債、又は利札を呈示及び提出することと引換えに、「銀行」宛てに振り出された関連通貨で支払われる小切手により、又は（保有者の選択によって）「銀行」における当該通貨建ての口座への振込みにより、なされる。「銀行」とは、当該通貨の主要な金融センターに所在する銀行をいう。

(b) 法律に従った支払い

あらゆる場合において、支払いは、（ ）支払場所において適用される金融その他の法令に従うものとし（但しこの規定は、本社債要項(9)の規定を損なうものではない。）、かつ、（ ）1986年米国内国歳入法（以下「内国歳入法」という。）第1471条(b)に定める契約に従い要求される源泉徴収若しくは控除、又は別途内国歳入法第1471条から第1474条までの規定、かかる条項に基づく規則若しくは合意、かかる条項に関する公的解釈、又は（下記(9)の規定を損なうことなく）かかる条項に関する政府間の提案を実施する法律に基づき賦課される源泉徴収若しくは控除に服するものとする。

(c) 代理人の選任

発行会社及び保証会社が当初選任した財務代理人、支払代理人及び計算代理人並びにそのそれぞれの所定営業所は以下に掲載するとおりである。財務代理人、支払代理人及び計算代理人は、発行会社及び保証会社の代理人としてのみ行為するものであり、いかなる社債権者若しくは利札所持人のためにも、あるいはいかなる社債権者若しくは利札所持人との間でも、代理人若しくは信託の義務若しくは関係を引き受けるものではない。発行会社及び保証会社は随時、財務代理人、その他の支払代理人又は計算代理人の選任を変更又は終了する権利及び追加の若しくはその他の支払代理人を選任する権限を有する。但し、発行会社及び保証会社が常に、（ ）財務代理人1名、（ ）（本社債要項によって要求される場合には、）1名若しくは複数の計算代理人、（ ）（本社債がシンガポール・エクスチェンジ・セキュリティーズ・トレーディング・リミテッドに上場されており、同証券取引所の規則により要求される場合には、）シンガポールに所定営業所を有する支払代理人、及び（ ）本社債が上場されるその他の証券取引所が要求するその他の代理人、を維持することを条件とする。

かかる変更又は所定営業所の変更についての通知は、社債権者に対して迅速に交付されるものとする。

財務代理人兼支払代理人兼計算代理人

株式会社三菱UFJ銀行 ロンドン支店

英国ロンドン EC2Y 9AN ロープメイカー・ストリート 25 ロープメイカー・プレイス

(MUFG Bank, Ltd., London Branch Ropemaker Place, 25 Ropemaker Street London EC2Y 9AN)

(d) 期限未到来の利札

本社債券は、償還日における支払いに際し本社債券の期限未到来の利札（もしあれば）とともに呈示されることを要し、期限未到来の利札が欠缺している場合は、期限未到来の欠缺利札の金額（又は、満額が支払われない場合は、期限未到来の欠缺利札の金額のうち現に支払われる償還金額の支払われるべき償還金額の総額に対する割合に相当する金額）は、最終償還金額又は期限前償還金額から控除される。当該控除額は、かかる上記元本の支払いに適用される関連日（下記「(9) 租税」に定義される。）から10年以内に上記の手順により当該欠缺利札の提出と引換えに支払われるものとする（当該利札が本社債要項（10）に従い無効になったかどうかを問わない。）。

本社債の償還支払日が利息の支払日ではない場合、直近の利息支払日又は付利開始日から発生した利息は、償還される本社債の支払提示（及び提出（それが適当な場合））によってのみ支払われる。

(e) 非営業日

本社債又は利札の支払日が営業日でない場合、その保有者は、翌営業日までその支払いを受ける権利がなく、またかかる延期された支払いに関する利息その他の金額を受け取る権利も有しない。本段落において「営業日」とは、提示に関連する場所（ロンドン及び東京）において銀行及び外国為替市場が営業している日（土曜日及び日曜日を除く。）であって、かつ該通貨建てで銀行に開設された口座に宛てて支払いがなされる場合においては該通貨の使用国の主要な金融市場において当該通貨で国為替取引が行われる日をいう。

(9) 租税

発行会社により又は発行会社に代わりなされる本社債及び利札に関する元本及び利息の支払い、並びに保証会社により、又は保証会社に代わりなされる本保証に基づく支払いは全て、日本により若しくは日本国内で又は日本の課税権限を有するその当局により賦課、徴収、徴求、源泉徴収又は査定されるあらゆる性質の税金、税、賦課金又は政府負担金（以下「租税」という。）の負担なくそしてこれらの源泉徴収又は控除なしに、なされるものとする。ただし、かかる源泉徴収又は控除が法律によって要求される場合はこの限りではなく、発行会社又は（場合により）保証会社は、社債権者及び利札所持人が、かかる源泉徴収又は控除が要求されなかったと仮定した場合に同人が受領していたであろう金額を受領することができるよう、追加額を支払うものとする。但し、以下に該当する場合には、本社債又は利札についてかかる追加額は支払われない。

(a) その他の関係：

保有者が単に本社債又は利札を保有するという以外に、当該保有者が日本との間でその他の関係を有することを根拠としてかかる本社債又は利札について税金、税、賦課金又は政府負担金の支払義務を負う保有者に対して、又はかかる保有者のために第三者に対して、支払いが行われる場合。

(b) 特殊関係者：

発行会社を支配し若しくは発行会社に支配されある者又は租税特別措置法（昭和32年法律第26号・その後の改正を含む。以下「租税特別措置法」という。）第6条及び租税特別措置法施行令（昭和32年政令第43号・その後の改正を含む。以下「租税特別措置法施行令」という。）に定める発行会社と特殊の関係のある者（以下「特殊関係者」という。）で日本国の非居住者又は内国法人以外の法人である保有者に対して、又はかかる保有者のために第三者に対して、支払いが行われる場合。

(c) 連動社債：

()発行会社又は()発行会社の特殊関係者にかかる、利益の額、売上金額若しくは収入金額又は租税特別措置法及び租税特別措置法施行令に定められるその他の類似の指標を基礎として利子の額が計算される社債の保有者に対して、又はかかる保有者のために第三者に対して、支払いが行われる場合。

(d) 関連日後30日を経過した後の提示：

本社債又は利札が、関連日（以下に定義する。）から30日を経過した後に提示された場合。但し、その保有者が当該関連日から30日目の日に支払いのために提示したとすれば支払いを受けることのできた追加額についてはこの限りでない。

(e) 利子受領者情報又は非課税適用申告書：

() (x) 支払代理人又は参加者（以下に定義する。）に対して、利子受領者情報（以下に定義する。）を提供するか、(y) 本社債又は利札が支払いのために提示される支払代理人又は発行会社に対して非課税適用申告書（以下に定義する。）を提出するという要件について、当該要件に従えばかかる源泉徴収又は控除を免除されるにもかかわらずかかる要件に従わない保有者に対して、又はかかる保有者のために第三者に対して、支払が行われる場合、又は、() その利子受領者情報が、参加者及び関係する外国国際決済機関からかかる支払代理人に対して適式に通知されない保有者に対して、又はかかる保有者のために第三者に対して、支払いが行われる場合。

(f) 日本国の居住者：

日本の税法上、日本国居住者又は内国法人とみなされる保有者（但し、() 利子受領者情報を提供するか、非課税適用申告書を提出するという要件に従った指定金融機関（以下に定義する。）、及び() 当該日本国居住者又は内国法人が、発行会社が選任した日本における支払代理人を通じて本社債の利息を受け取ることを根拠として、発行会社が源泉徴収又は控除を行うことを要求される租税について、自身がかかる発行会社による租税の源泉徴収又は控除を免除される状態にある旨を（直接、若しくは参加者その他を通じて間接的に）当該支払代理人又は発行会社に対して適式に通知した日本国居住者又は内国法人を除く。）に対して、又はかかる保有者のために第三者に対して、支払いが行われる場合。

(g) 非居住者申請：

かかる源泉徴収又は控除が、当該保有者が関連当局に対して非居住者申請その他これに類する免税の申請を行うことにより免れ得る（あるいは免れ得た）ものである場合。

本社債要項において本社債又は利札に関する「関連日」とは、その支払期日が最初に到来した日、又は（支払われるべき金員のうち一定の金額が不当に留保又は拒否された場合には）残存している金額が全額支払われた日若しくは（これより早い場合には）本社債要項に従って再度本社債又は利札を呈示すれば支払いが行われるという旨の通知が社債権者に対して適式に交付されてから7日が経過した日（但し、かかる呈示をなした時点で実際に支払いが行われることを条件とする。）をいう。本社債要項において、（ ）「元本」は、本社債について支払われる一切の追加額、満期償還金額、期限前償還金額、及び本社債要項(7)又はその変更若しくは補足に従って支払われる元本の性質を有するその他一切の金額を含むものとみなされ、（ ）「利息」は、一切の利息額及び本社債要項(4)又はその変更若しくは補足に従って支払われるその他一切の金額を含むものとみなされ、また（ ）「元本」及び/又は「利息」は、本社債要項に従い支払われるいかなる追加額を含むものとみなされる。

本社債又は利札が、国際的な決済機関の一定の参加者又は一定の金融仲介機関（それぞれ、以下「参加者」という。）を通じて保有されている場合、租税に関して発行会社による源泉徴収又は控除を受けることなく支払いを受けるためには、かかる保有者が（ ）特殊関係者に該当しない場合かつ日本国の非居住者若しくは内国法人以外の法人であるか、又は（ ）租税特別措置法及び租税特別措置法施行令（それらに基づく省令及びその他の規則と併せて、以下「本件法」という。）に定める一定の範疇に該当する日本の金融機関（以下「指定金融機関」という。）である場合（これらは全て、本件法の定義に従うものとする。）、かかる保有者は、参加者に対して当該本社債又は利札の保管を委託する時点で、かかる保有者が租税の源泉徴収又は控除を行う要件から免除されることを証明するために本件法により規定される一定の情報（以下「利子受領者情報」という。）を提供するものとし、またかかる免税が適用されなくなった場合（日本国の非居住者若しくは内国法人以外の法人が発行会社の特殊関係者となった場合も含む。）には、参加者にその旨通知するものとする。

本社債又は利札が、参加者により保有されない場合には、租税に関して発行会社による源泉徴収又は控除を受けることなく支払いを受けるためには、かかる保有者が（ ）特殊関係者に該当しない場合かつ日本国の非居住者若しくは内国法人以外の法人であるか、又は（ ）指定金融機関である場合（これらは全て、本件法の定義に従うものとする。）、かかる保有者は、利息の支払いを受ける都度、それと同時又はそれ以前に、当該支払代理人又は発行会社に対して、支払代理人から取得した様式の源泉徴収の免除にかかる申請（以下「非課税適用申告書」という。かかる申告書にはとりわけ、保有者の氏名及び住所、本社債の名称、関連する利払日、利息の金額、保有者の個人番号若しくは法人番号並びに同人が非課税適用申告書を提出する資格を有する旨を記載しなければならない。）を、自身の身分証明及び居住地に関する証拠書類を添えて、提出するものとする。

(10) 時効

本社債及び利札の支払いに関する発行会社及び保証会社に対する請求権は、それぞれの関連日から元本については10年以内、利息については5年以内に請求がなされない限り、時効により無効となるものとする。

(11) 債務不履行事由

以下のいずれかの事由（以下「債務不履行事由」という。）が発生した場合、本社債の保有者は財務代理人の所定営業所に宛てて、当該本社債についての払戻が直ちに行われるべきであることを記した通知を送付することができ、この場合、かかる債務不履行事由が、財務代理人がかかる通知を受領する前に治癒されない限り、本社債の期限前償還金額及び支払日までに発生した利息（それがあつた場合）について直ちに支払期限が到来するものとする。

(a) 不払い：

（ ）本社債のいずれかの元本の支払いがその支払期日において行われなかった場合、若しくは（ ）本社債のいずれかの利息の支払いがその支払期日から7日を超えて行われなかった場合。

(b) その他の義務の違反：

発行会社又は保証会社が本社債に関するその他の一つ若しくは複数の義務の履行を怠り若しくは遵守しない場合で、かかる不履行が治癒不能であるか、社債権者が財務代理人の所定営業所に宛てて当該不履行の通知を行ってから30日以内に治癒されない場合。

(c) クロスデフォルト：

以下のいずれかに該当する場合。

- () 発行会社、保証会社又は主要子会社の現在又は将来におけるその他のいずれかの債務が、債務不履行、潜在的債務不履行、債務不履行事由への該当又はこれらに類する事実（どのように称されるかを問わない。）を根拠としてその所定の満期より前に支払期日を迎えるか、かかる支払期日の到来を宣言され得る状態になった場合。
- () () に掲げる債務のいずれかについて、支払期日が到来しているにもかかわらず支払いがなされないか、又は、適用される当初の支払猶予期間中に支払いがなされない場合。
- () 発行会社、保証会社又は主要子会社のいずれかが、借入若しくは資金調達を行った金員に関する現在若しくは将来の保証若しくはかかる金員に関する補償に基づいて自身が支払うべき金額を、支払期日が到来しているにもかかわらず支払わない場合。
但し、本(c)に掲げる上記の事由のうち一つ又は複数が発生した債務、保証及び補償の総額が、5百万米ドル又はその相当額（本項が適用される日付において主幹銀行が提示する米ドルに対する当該通貨の直物相場の仲値に基づく。）と同額か、それを上回る場合に限る。

(d) 強制執行手続：

発行会社、保証会社又は主要子会社の財産、資産又は収益の全部又は重大な部分について差押その他の強制執行、その他の法的措置の対象となり、それが30日以内に取り消し又は停止されない場合。

(e) 清算又は解散：

発行会社、保証会社又はいずれかの主要子会社の清算又は解散について、管轄権を有する裁判所による最終審の終局命令が下されるか、発行会社、保証会社又は主要子会社においてその旨の有効な決議が可決された場合。但し、かかる清算又は解散が、企業結合、合併又は組織再編の一環として、あるいはそれらに従って行われる場合であり、かつ存続する会社又はその結果として形成された会社が、（発行会社又は保証会社の場合は）本社債及び利札に基づく発行会社又は保証会社の債務全て、又は（主要子会社の場合は）当該主要子会社の事業、業務及び資産を有効に引き受ける場合はこの限りではない。

(f) 担保権者：

発行会社、保証会社又はいずれかの主要子会社の破産又は債務超過において、その資産及び事業の全て又は実質的に全てを担保権者が所有することとなったか、それらについて受託者又は管財人が選任された場合で、かかる所有又は選任が30日間、取り下げ又は停止されずに継続した場合。

(g) 支払停止、事業の中断又は債務の支払不能：

発行会社、保証会社又はいずれかの主要子会社が、（日本の破産法上の）支払停止に陥ったか、（上記(11)(e)に記載の企業結合、合併又は組織再編の一環として行われる場合を除いて）事業の遂行を中止するか、又は、期日が到来した債務について一般に支払いができなくなった場合。

(h) 債務超過又は解散の判決：

発行会社、保証会社若しくはいずれかの主要子会社について破産又は倒産している旨を宣告する終局決定又は命令が管轄権のある裁判所によりなされるか、又は、発行会社、保証会社若しくはいずれかの主要子会社について破産法、会社更生法、民事再生法、会社法その他これに類する日本若しくはその他の法域の法律に基づいて破産若しくは更生に関する手続き若しくは調整の開始に関する判決を求める申し立てを承認する終局決定又は命令が、管轄権を有する裁判所によりなされた場合で、かかる決定又は命令が30日間、取り消されずに継続した場合。あるいは、発行会社、保証会社又はいずれかの主要子会社又はこれらのいずれかの全財産の破産若しくは倒産について、管財人、清算人、受託者若しくは譲受人を選任する旨の、あるいは発行会社、保証会社又はいずれかの主要子会社の破産若しくは倒産において清算若しくは解散を行う旨の終局決定若しくは命令が、管轄権を有する裁判所により下されたか又は発令された場合で、かかる判決又は命令が30日間、取り消されずに継続した場合。

(i) 手続きの開始又は手続きに対する同意：

発行会社、保証会社若しくはいずれかの主要子会社が、自らに関する破産、債務整理、会社更生若しくは倒産に関する日本の法律に基づく手続きを自ら開始したか、かかる手続きに同意した場合、又は債権者全般の利益のために譲渡を行ったか、債権者全体との間で債務整理約を締結した場合。

(j) 保証：

保証が理由を問わず有効若しくは執行可能でないか（若しくは保証会社が有効若しくは執行可能でないと主張するか）又は有効若しくは執行可能でなくなった場合。

(12) 社債権者集会及び変更

(a) 社債権者集会

財務代理人契約は、本社債要項の変更に関する特別決議による承認を含め、本社債の社債権者の利益に影響を及ぼす事項を審議するための社債権者集会を招集する際の規定を定めている。社債権者集会は、当該時点で未償還の当該社債の額面金額の10%以上を保有する社債権者により招集可能である。特別決議を審議するために招集される集会の定足数は、当該時点で未償還の当該社債の額面金額の過半数を保有し又は示す2名以上の者が参加する必要がある。また、延期集会においては、保有額面金額を問わず当該社債を保有する者2名以上を定足数とする。但し、かかる集会の議事に、とりわけ、() 当該社債の満期日若しくは償還日若しくはその他当該社債に関する利息若しくは利息額の支払日の変更、() 当該社債の額面金額、分割償還額若しくは償還について支払われる追加額の減額若しくは取消、() 当該社債に関する（一つ若しくは複数の）金利の引き下げ、若しくは金利若しくは利息額を算定する方法若しくは基準あるいは当該社債に関する利息額を算定する基準の変更、() 金利若しくは、分割償還額、償還金額の最高額及び/又は最低額がある場合のその引き下げ、() 消却額面金額の算定方法を含めた、満期償還金額若しくは期限前償還金額若しくは選択償還金額の算定方法若しくは算定基準の変更、() 当該社債の支払い若しくは表示に関する通貨の変更、() 保証の変更若しくは取消、又は() 社債権者集会において必要とされる定足数若しくは特別決議を可決するために必要とされる過半数に関する規定の変更、に関する議案が含まれる場合はこの限りではなく、この場合に必要とされる定足数は、当該時点で未償還の当該社債の額面金額の75%以上（延期集会においては25%以上）を保有する者又は保有者を代理する者が参加する必要がある、かつ、2名以上参加する必要がある。適時に可決されたあらゆる特別決議は、（当該決議が可決された集会に同人が出席していたか否かに関わらず、）社債権者及び全ての利札所持人に対して拘束力を有する。

財務代理人契約には、未償還の当該社債の額面金額の90%以上の保有者による又は保有者のための書面による決議は、如何なる目的においても、適時に招集され開催された集会において可決された特別決議として有効かつ効力を生じる旨が規定されている。かかる書面による決議は、1人又は複数の社債権者により又は社債権者のために署名された1つ又は同一の様式による複数の書面によりなされる。

(b) 財務代理人契約の変更

発行会社及び保証会社は、財務代理人契約の変更、財務代理人契約に関する不履行若しくは提案された不履行についての宥恕若しくは許諾、又は財務代理人契約の不遵守を、これらが社債権者に不利益をもたらさないであろうと合理的に予想される場合に限り、許容するものとする。

(13) 本社債及び利札の交換

本社債及び利札が紛失、盗難、損傷、汚損又は毀損した場合、適用法令及び証券取引所その他の関連当局の規則に従うことを条件として、発行会社が随時その目的で指定し、社債権者に通知するところに従い、財務代理人その他の支払代理人の所定営業所において、請求者がそれに関して発生した手数料及び費用を支払うことにより、また、証拠、担保及び補償その他発行会社が要求する事項に関する条件（とりわけ、紛失、盗難若しくは毀損したとされている本社債又は利札がその後支払いのために呈示された場合には、発行会社の要請により発行会社がかかる本社債又は利札について支払うべき金額が支払われる旨規定することができる。）において、交換することができる。損傷又は汚損された本社債及び利札については、代わり券が発行される前にこれを提出しなければならない。

(14) 追加発行

発行会社は随時、社債権者又は利札所持人の同意なくして、本社債と同様の要項（なお、当該要項における「発行日」は、本社債の初回発行日を指す。）が適用される追加の社債を設定又は発行することができ、かかる追加発行された社債は、本社債と統合され、本社債とともに単一のシリーズを構成し、本社債要項中の「本社債」という語はそれによって解釈されるものとする。

(15) 通知

本社債の保有者に対する通知は、アジアにおいて一般に頒布されている主要な日刊紙（アジア・ウォール・ストリート・ジャーナルとなる予定）に掲載することにより、有効になされたものとみなされる。かかる掲載を行うことができない場合、アジアにおいて一般に頒布されている別の主要な英字日刊紙に掲載することにより、有効に通知がなされたものとみなされる。かかる通知は全て、当該掲載日、あるいは（複数回又は異なる日付において掲載された場合には）上記に従って最初に掲載が行われた日付においてなされたものとみなされる。

利札所持人は、あらゆる目的において、本項に従ってなされた本社債の保有者に対する通知の内容を知らされているものとみなされる。

本社債が大券により表章されており、かかる大券がクリアリング・システムを実質保有者として保有されている限り、社債権者に対する通知は、本社債要項により要求される新聞への掲載に代えて、当該システムに対し、通知を受領する権限を有する口座名義人に連絡するよう当該通知を交付することにより、これを行うことができる。

(16) 準拠法及び管轄裁判所

(a) 準拠法

本社債及び利札並びにこれらに関連し又は起因して発生した契約外の債権債務は、英国法に準拠し、同法に従って解釈される。

(b) 管轄裁判所

本社債又は利札に起因若しくは関連して生じるあらゆる紛争は、英国の裁判所の管轄に服するものとし、したがって本社債若しくは利札に起因若しくは関連して生じるあらゆる法的措置又は手続き(以下「手続き」という。)は、同裁判所に対して提起される。発行会社及び保証会社は英国の裁判所の裁判管轄権に服することに同意し、かかる同意は取り消すことができないものとし、裁判籍を根拠として、あるいは手続きが不便な法廷地で提起されたことを根拠としてかかる裁判所における手続きに対する異議申し立てを行う権利を放棄する。かかる服従は本社債及び利札の各保有者の利益のためになされるものであり、かかる者のいずれかが管轄権を有するその他の裁判所において手続きをとる権利に影響を及ぼすものではなく、また一つ又は複数の法域において手続きをとったことにより、(同時に行うか否かを問わず)別の法域で手続きをとることが妨げられるものではない。

(c) 送達

発行会社及び保証会社は、英国ロンドン EC2Y 9AN ロープメイカー・ストリート 25 ロープメイカー・プレイスに所在する株式会社三菱UFJ銀行ロンドン支店を、発行会社又は保証会社のために、また発行会社又は保証会社に代わって英国における手続きに関する送達を受けるその英国における代理人として選任し、かかる選任は取消不能とする。かかる送達は、それが発行会社又は保証会社に転送され、発行会社又は保証会社により受領されたかに関わらず、かかる送達受領代理人に交付された時点で完了したものとみなされる。かかる送達受領代理人がいずれかの理由により送達受領代理人として行為することができなくなった場合、又は英国に住所を有さなくなった場合、発行会社又は保証会社は、代わりに送達受領代理人を選任することに同意し、かかる同意は取消不能とし、また発行会社又は保証会社は上記(15)に従って直ちにかかる選任について社債権者に通知する。いかなる規定も、法律により許容される方法により送達する権利に影響を及ぼすものではない。

(17) 保証の内容及び条件

以下のとおり、保証会社は、発行会社が本社債に関して支払う全ての合計額の支払いを社債権者に対し保証し、捺印証書に基づき口座名義人に対して保証する。

(a) 保証

保証会社は、発行者が捺印証書上の又は本社債上の全ての支払債務につき、その支払日(通常の支払日か期限の利益を喪失した場合かを問わない。)において、その支払いの不履行があった場合、当該支払日の通常の営業時間(当該支払がなされる都市における営業時間をいう。)の終了時まで、当該不履行額全額を支払うことを、無条件かつ取消不能に保証する。保証証書上の支払いは、本社債要項に従うものとする。

(b) 主債務者としての保証会社

保証会社、保有者及び口座名義人との間では、発行者の負う債務には何ら影響を与えずに、保証会社は、あたかも、単なる保証人ではなく唯一の主債務者であるかのように保証証書により責任を負う。したがって、以下の()乃至()を含めて、保証会社が唯一の主債務者であったと仮定した場合には免責又は影響されないであろう事由によって保証会社の債務は免責されずかつ何らの影響も受けないものとする。

- () 時期を問わず発行会社その他の者に対し付与される期限延長、支払猶予、放棄又は同意;
- () 保証証書のその他の条項に対する、本社債要項に対する、又はいかなる担保その他の保証若しくは補償に対する、何らかの変更;
- () 発行会社又は他の者に対する支払請求の有無;
- () 保証証書、本社債、捺印証書又はその他の担保又はその他の保証若しくは補償の執行の有無;
- () 担保、保証又は補償の徴求、存在又は免責;
- () 発行会社又はその他の者の解散、合併、再建又は更生;又は
- () 保証証書、本社債若しくは捺印証書の条項又はこれらに基づく発行会社の債務の違法、無効若しくは執行不能、又はこれらにおけるいかなる瑕疵。

(c) 保証会社の義務の存続性

本社債、捺印証書及び保証証書上の全ての支払債務が完済され、かつ発行会社が本プログラムに基づき追加の本社債を発行する可能性がなくなるまで、保証証書上の保証会社の義務は、継続的な担保として、完全な効力を維持し続ける。さらに、保証会社の当該義務は、その時々で存在する他の担保、保証及び補償（それらが保証会社により付与されたものか否かを問わない。）に追加されるものであり、これらに代わるものではない。また、保証会社の当該債務の執行には、発行会社その他いかなる者に対する訴求又は他の担保、保証若しくは補償の権利行使を先行させる必要はない。保証会社は、いかなる種類の全ての通知及び要求を不可取消的に放棄している。

(d) 保証会社の権利行使

本社債、捺印証書及び保証証書上の全ての支払債務が完済されるまでは、保証会社は、本保証に基づく義務の履行を理由とした補償を求める権利行使又は権利の執行を行わず、いかなる担保、その他の保証若しくは補償の利益を受け又はこれらの権利行使を行わない。

(e) 支払いの否認

保証会社は、保有者又は口座名義人が本社債上又は捺印証書上の支払債務に関して受領した金額の全部又は一部を理由の如何（破産、倒産、清算、解散、その他準拠法を問わず同種の法制を含む。）を問わず返還することを求められたことを原因として、当該保有者又は当該口座名義人が蒙った又は負担した費用、損失又は債務を、当該保有者又は当該口座名義人からの要求に従い、当該保有者又は当該口座名義人に対し、税引後ベースで補償する。いずれにしても保証会社は当該保有者又は当該口座名義人が返還した金額を当該保有者又は当該口座名義人からの要求に従い支払う。

(f) 発行会社の債務

保証会社が保証証書に基づき金銭の支払義務を負うにいたった場合、発行会社は当該金銭が未払いである限り（但し、発行会社の清算の場合を除く。）、発行会社が保証会社に対して随時負担する期限の到来した債務を保証会社に対して支払わないものとする。

(g) 補償

別個独立かつ代替の条項として、保証会社は、以下のとおり無条件かつ撤回不能的に誓約する。

- () 本社債、捺印証書又は保証証書に基づき発行会社が支払いを義務付けられていると規定されているにもかかわらず、理由（既に存在しているか否か、発行会社、保証会社、保有者又は口座名義人に既に知られているか否か又は知られつつあるか否かを問わない。）のいかんを問わず、保証に基づき保証会社から回収可能ではない金額については、保証会社が当該金額についての唯一の主債務者であるかのように保証会社から回収可能であるものとし、保証会社は当該金額を保有者又は口座名義人（いずれかは場合による）に対してその要求に従い支払う。
- () 保証会社は、(i) 本社債、捺印証書又は保証証書に基づき発行会社が支払いを義務付けられていると規定されている金額がその支払期日に支払われず又は保証証書若しくは本社債要項に規定されている通りに支払われなかったことを原因として、又は(ii) 本社債、捺印証書又は保証証書に基づく発行会社のいかなる支払債務が、理由（既に存在しているか否か、発行会社、保証会社、保有者又は口座名義人に現在知られているか否か又は将来知られるか否かを問わない。）のいかんを問わず、無効であるか無効となり、無効化可能であるか無効化可能となり又は執行不能であるか執行不能となることを原因として、各保有者及び口座名義人が被った損害を、当該保有者及び当該口座名義人に対する第一次的な債務として、当該保有者及び当該口座名義人に対して、補償する。上記損害の金額は、本社債、捺印証書又は保証証書に基づき発行会社が支払いを義務付けられていると規定されている金銭の額である。

(h) 条項の参照

なお、保証会社は、保証会社に関係する本社債要項に規定される全ての条項を遵守し、かつ当該条項に拘束されることに同意している。

(i) 税負担のない支払い

保証会社は、本保証に基づいて行われる支払いに関し、本社債要項（9）条（上記（9）をいう。但し、同（9）条（a）～（g）号の制限を受ける。）に従い、各保有者及び口座名義人の利益のために支払いを行う。同（9）条は保証証書に参照されその一部となり、社債権者は保有者及び口座名義人と場合に応じて読み替えられる。

(j) 印紙税

保証会社は、保有者及び口座名義人に対して、日本、ベルギー若しくはルクセンブルグ（そのいずれかは場合に応じる。）又は本社債の通貨建てとなり又は本社債が支払われる通貨のその他の国において、保証証書の締結、履行、権利行使又は証拠能力の付与に関連して、及び／又は保証証書の変更、補足又は権利放棄に関し、課税目的の公共団体若しくは税務当局に対し、支払義務を負う全ての印紙税、文書税、登録税若しくは同種の租税を、すみやかに遅くともいかなるペナルティが課せられる前までに、支払うことを誓約する。保証会社は各保有者及び口座名義人に対して、上記税金の支払いの遅延又は不払いに関連し若しくはそれにより生じる債務を税引後ベースで補償することを約束する。

(k) 変更及び終了

保証会社は、保証証書及びこれに基づく義務の修正、変更、終了又は停止を行ってはならない。当該修正、変更、終了又は停止を行うためには、それについて特別決議（上記（12）（社債権者集会及び変更）参照）による承諾を要する。当該特別決議においては、本社債の要項において規定される特別決議の定足数をその時点において現存する本社債の各シリーズ（回号）毎にその保有者について適用するものとする。但し、保証会社は、保証証書の補足によりいつでも保証会社が負う義務の増加又は延長することを妨げない。

(l) 利益

本保証は社債権者及び口座名義人の利益を確保するためのものである。

(m) 保証の預託

保証会社は、保証会社の債務が全て解消されるまで、財務代理人に対し、保証証書を預託し占有させるものとする。保証会社は、各保有者及び各口座名義人が、保証証書の写しを作成し取得する権利を認めるものとする。

(n) 準拠法

保証証書及び関連する全ての契約上の義務は英国法を準拠法とし、これに従い解釈される。

(o) 裁判管轄

保証証書に起因若しくは関連して生じるあらゆる紛争は、英国の裁判所の管轄に服するものとし、したがって保証証書に起因若しくは関連して生じるあらゆる手続きは、同裁判所に対して提起される。保証会社は英国の裁判所の裁判管轄権に服することに同意し、かかる同意は取り消すことができないものとし、裁判籍を根拠として、あるいは手続きが不便な法廷地で提起されたことを根拠としてかかる裁判所における手続きに対する異議申し立てを行う権利を放棄する。かかる服従は保有者及び口座名義人の利益のためになされるものであり、かかる者のいずれかが管轄権を有するその他の裁判所において手続きをとる権利に影響を及ぼすものではなく、また一つ又は複数の法域において手続きをとったことにより、（同時に行うか否かを問わず）別の法域で手続きをとることが妨げられるものではない。

(p) 送達代理人

保証会社は、英国ロンドン EC2Y 9AN ロープメイカー・ストリート 25 ロープメイカー・プレイスに所在する株式会社三菱UFJ銀行ロンドン支店を、保証会社のために、また保証会社に代わって英国における手続きに関する送達を受けるその英国における代理人として選任し、かかる選任は取り消し不能とする。かかる送達は、それが保証会社に転送され、保証会社により受領されたかに関わらず、かかる送達受領代理人に交付された時点で完了したものとみなされる。かかる送達受領代理人がいずれかの理由により送達受領代理人として行為することができなくなった場合、又は英国に住所を有さなくなった場合、保証会社は、代わりに送達受領代理人を選任することに同意し、かかる同意は取り消し不能とし、また保証会社は本社債要項に従って直ちにかかる選任について社債権者に通知する。いかなる規定も、法律により許容される方法により送達する権利に影響を及ぼすものではない。

リスク要因及びその他の留意点

本社債への投資には、一定のリスクが伴う。各投資家は、本社債へ投資することが適当か否か判断するにあたり、以下に掲げるリスク要因及びその他のリスク要因を検討する必要がある。ただし、以下の記載は本社債に含まれるすべてのリスクを網羅した完全な記載を意図したものではない。

投資家は、上記のリスク要因の1つが及ぼす影響により、他の要因を理由とする本社債の取引価値の変動が、一部又は全部相殺されることがあることを理解すべきである。

本社債の購入を検討中の投資家は、本社債のリスクを理解し、自らの個別的な財務状況、本書に記載される本社債に関する情報に照らし、本社債が投資に相応しいか否かを慎重に検討された後、投資の決定を行うべきである。

(1) 当社はグループ会社への金銭の貸付けとそのための資金調達のための会社であること

当社は、保証会社及びそのグループ会社への金銭の貸付と、その為の金融機関からの借入及び社債の発行による資本市場からの資金調達以外の事業を展開しておらず、また本社債の社債権者が破産、破綻処理または同様の手続に際し本社債に関する請求を行った場合において当該社債権者に分配可能な当社の資産は限定的となり、当該社債権者は本保証に基づき保証会社から受ける支払いの限度で本社債の支払いを受ける場合がある。

(2) 保証会社の債務が構造的に現在若しくは将来のグループ会社の債務に劣後すること

保証会社は、第一義的にグループ会社を運営する持株会社である。したがって、()保証上の保証会社の債務は実質的に現在若しくは将来のグループ会社の債務に劣後し、()グループ会社の資産については、現在若しくは将来のグループ会社の債権者（取引上の債権者、貸付人その他の債権者、優先株式の保有者（もしあれば）を含む。）の債権が保証会社の債権及び保証会社の債権者（社債権者を含む。）の債権に優先する。

(3) 本社債の流通市場の不存在

本社債を途中売却するための流通市場が形成されると想定することはできず、流通市場が形成された場合でも、かかる流通市場に流動性があるという保証はない。発行会社、売出人及びそれらの関連会社は現在、本社債を流通市場に流通されることは意図していない。また、たとえ流動性があったとしても、本社債の所持人は、円金利市場並びに発行会社及び保証会社の信用状況の変動等、数多くの要因により、満期償還日前に本社債を売却することにより大幅な損失を被る可能性がある。したがって、本社債に投資することを予定している投資家は、満期償還日まで本社債を保有する意図で、かつそれを実行できる場合にのみ、本社債に投資されたい。

(4) 信用リスク

本社債の価値は、発行会社及び保証会社の信用格付、財務状況若しくは業績が実際に変化した場合又はその変化が予想される場合に影響を受けることがある。また、本社債の償還及びその保証の履行の確実性は、発行会社又は保証会社の信用力に依拠しており、発行会社又は保証会社の信用状況が損なわれた場合、本社債を購入した投資家に損失が生じる可能性がある。

信用格付は本社債の構造、市場その他の事情全ての潜在的な影響を反映したものではなく、本社債の価値は他の事情の影響を受けることがある。信用格付は、有価証券の売買、保有に関する推奨でも発行会社または保証会社の信用の質を保証するものなく、信用格付業者により変更されたり廃止されうる。

(5) 利率変動リスク

本社債の利率は、一定の観測期間中の観測地点における最高気温が摂氏25度以上の日数により変動する。

(6) 中途売却価格に影響する要因

上記「本社債の流通市場の不存在」において記述したように、本社債の償還前の売却はできない場合がある。また、売却できる場合も、その価格は、次のような要因の影響を受ける。

満期償還日前の本社債の価格は、様々な要因に影響され、ある要因が他の要因を打ち消す場合も、あるいは相乗効果をもたらす場合もあり、複雑に影響する。以下に、他の要因が一定の場合に、ある要因だけが変動したと仮定した場合に予想される本社債の価格への影響を例示した。

金利

円金利が下落すると本社債の価格が上昇し、円金利が上昇すると本社債の価格が下落する傾向があると予想されるが、発行会社の信用状況によってはかかる傾向が変化するため、以上の傾向が逆転する可能性もある。

発行会社又は保証会社の格付

一般的に発行会社又は保証会社の格上げが行われると本社債の価格は上昇し、格下げが行われると本社債の価格は下落すると予想される。

最高気温が摂氏25度以上の日数

本社債に適用される利率は、一定の観測期間中の観測地点における最高気温が摂氏25度以上の日数に連動して決定される。一般的に、当該日の日数が多い場合の本社債の価格は上昇し、当該日の日数が少ない場合の本社債の価格は下落することが予想される。

(7) 金利リスク

利付債への投資には、将来の市場金利の変更の悪影響を受けるリスクがある。

(8) 税制リスク

本社債（保証を含む。）の取得、保有、処分等に関する課税上の取扱いは、関係する国の税制を受け、将来においてその取扱いが変更される場合がある。

(9) 法制リスク

社債の要項は本社債発行日現在の英国法に基づいており、本社債発行後の新しい判例や英国法又は行政実務の変更の影響を受ける可能性がある。

その他

(1) 本社債の当初発行

大券は、トランシェの当初発行日又はそれ以前に共通預託機関（以下に定義する。）に交付可能である。

ユーロクリア及びクリアストリーム・ルクセンブルグに関する共通預託機関（以下「共通預託機関」という。）に対して大券の当初預託が行われた時点で、ユーロクリア又はクリアストリーム・ルクセンブルグは、申込人が申込み及び支払いを行った額面金額に相当する本社債の額面金額について各申込人に対し貸方を立てる。

(2) 口座名義人とクリアリング・システムとの関係

ユーロクリア又はクリアストリーム・ルクセンブルグの記録上、大券により表章される本社債の保有者として記録されている者は、発行会社がかかる大券の持参人に対して、大券の支払い及びその他大券から生じるすべての権利について、ユーロクリア又はクリアストリーム・ルクセンブルグのそれぞれの規則及び手続きに従い、自身の持分について、ユーロクリア又はクリアストリーム・ルクセンブルグに対してのみその権利を主張できる。かかる者は、かかる本社債が大券により表章される限り、かかる本社債についてなされるべき支払いに関して発行会社に直接請求する権利を有さず、発行会社の支払義務は、大券の持参人に対する大券の支払いにより免責される。

(3) 交換

恒久大券、交換日以降、手数料の支払なくして、その全て（一定の場合にはその一部）を確定社債券に交換できる。但し、（i）本社債の元本が期日に支払われない場合に、発行会社が保有者及び財務代理人に対して確定社債券への交換を選択する旨通知した場合、（ii）保有者が財務代理人に対して確定社債券の交換をの請求した場合又は（iii）以上以外の場合で（a）恒久大券がユーロクリア又はクリアストリーム・ルクセンブルグを実質保有者として保有されている場合でかつこれらの決済機関が（休日、法定又はその他の理由により）14日間以上連続して業務を行わないか若しくは恒久的に業務を行わない予定であることを発表したか若しくは実際に業務を中止した場合若しくは（b）本社債が期限までに支払われない場合で保有者が交換を財務代理人に請求する場合に限る。恒久大券が確定社債券に交換される場合、額面金額においてのみ発行される。

「交換日」とは、交換を要求する通知が交付された日以降少なくとも60日（期限に支払いを行わなかった場合は30日）経過した日で財務代理人の所定事務所が所在する都市及び該当決済機関が所在する都市において銀行が営業している日をいう。

(4) 支払い

交換日以降に期限を迎える支払いは、確定社債券への交換が不適切に保留され又は拒絶された場合を除き、大券に対しては行われない。大券に表章される本社債に関する全ての支払いは、財務代理人又は社債権者に対し通知された支払代理人に対する、裏書きのための大券の呈示又はそれ以降の支払いが存在しない場合には、大券の提出に対して行われる。各支払いの記録は大券に裏書きされ、本社債に関する支払いがなされたことの一応の証拠とされる。

(5) 通知

本社債が大券により表章されており、かつかかる大券が決済機関を実質保有者として保有されている限りにおいて、当該シリーズの本社債の保有者に対する通知は、本社債要項により要求される公告に代えて、当該決済機関に対し、通知を受領する権限を有する口座保有者に連絡するよう当該通知を交付することにより、これを行うことができる。

(6) 日本国の租税

以下は本社債に関する本有価証券届出書提出日現在の日本国の租税に関する主な法令上の課税関係についての一般的な説明であり、本社債に係る日本国の課税関係を包括的に説明するものではない。各投資家の状況に応じて、本社債に投資することによる個別具体的な課税関係について各自の会計・税務顧問に相談する必要がある。

(a) 利息に対する課税

本社債の利息は、一般に利子として課税され、日本国内の居住者が支払いを受ける本社債の利息は、それが国内における支払いの取扱者を通じて支払われる場合には、20%（15%の国税と5%の地方税。但し、2037年12月31日までに支払われる利息に関しては、復興特別所得税の対象となるため、20.315%（15.315%の国税と5%の地方税））の源泉徴収の対象となる。さらに、日本国内の居住者は、申告不要制度又は申告分離課税を選択することができ、申告分離課税を選択した場合、日本国の税法上20%（15%の国税と5%の地方税・2037年12月31日までは20.315%（15.315%の国税と5%の地方税））の税率となる。）の申告分離課税の対象となる。内国法人が支払いを受ける本社債の利息は、それが国内における支払いの取扱者を通じて支払われる場合には、15%（15%の国税。但し、2037年12月31日までに支払われる利息に関しては、復興特別所得税の対象となるため、15.315%（15.315%の国税））の源泉徴収の対象となる。当該利息は当該法人の課税所得に含められ、日本国の所得に関する租税の課税対象となる。但し、当該法人は当該源泉税額を、一定の制限の下で、日本国の所得に関する租税から控除することができる。

(b) 償還差益に対する課税

本社債の償還額が本社債の取得価額を超える場合の償還差益は、日本国の居住者の場合、20%（15%の国税と5%の地方税・2037年12月31日までは20.315%（15.315%の国税と5%の地方税））の税率による申告分離課税の対象となる。ただし、特定口座のうち当該口座内で生じる所得に対する源泉徴収を日本国内の居住者が選択したもの（源泉徴収選択口座）における本社債の償還差益は、確定申告を不要とすることができ、その場合の源泉徴収税率は、申告分離課税における税率と同じである。本社債の償還額が取得価額を下回る場合の償還差損については、一定の条件の下で、他の社債や上場株式等の譲渡所得等と損益通算を行うことができる。償還差益が内国法人に帰属する場合は、当該償還差益は課税所得に含められ、日本国の所得に関する租税の課税対象となる。償還差損が内国法人に帰属する場合は、当該償還差損は損金の額として、日本国の所得に関する租税の課税所得の計算に算入される。

(c) 譲渡に対する課税

本社債の譲渡による損益については、日本国内の居住者が本社債を譲渡した場合に生じた譲渡益は、20%（15%の国税と5%の地方税・2037年12月31日までは20.315%（15.315%の国税と5%の地方税））の税率となる。）の税率による申告分離課税の対象となる。ただし、特定口座のうち当該口座内で生じる所得に対する源泉徴収を日本国内の居住者が選択したもの（源泉徴収選択口座）における本社債の譲渡益は、確定申告を不要とすることができ、その場合の源泉徴収税率は、申告分離課税における税率と同じである。譲渡損については、一定の条件で、他の社債や上場株式等の譲渡所得等と損益通算を行うことができる。内国法人が本社債を譲渡した場合に生じた譲渡損益については、益金の額又は損金の額として課税所得に算入され法人税及び地方税が課される。

(d) 税制リスク

将来において、本社債に対する課税上の取扱いが変更される場合がある。

(7) 10月4日から10月12日の観測地点における過去の最高気温の推移

下記の表は、2013年から2017年における各年度の10月4日から10月12日の観測地点における最高気温の推移を表したものである。この最高気温の過去の推移は、将来の最高気温の動向を示唆するものではない。また、過去において最高気温が下記のように変動したことによって、最高気温が観測期間中も同様に推移することを示唆するものではない。

	2013	2014	2015	2016	2017
10月04日	20.5	25.7	27.1	32.0	21.3
10月05日	19.3	22.4	20.1	26.4	20.7
10月06日	24.3	28.4	22.4	31.3	18.6
10月07日	27.1	24.0	22.4	24.9	22.4
10月08日	29.6	24.4	24.6	25.3	26.4
10月09日	28.8	24.0	25.5	25.7	25.3
10月10日	28.4	26.3	20.4	19.6	28.6
10月11日	30.2	23.5	21.0	20.1	23.4
10月12日	31.3	20.6	23.1	23.2	29.0

第3【第三者割当の場合の特記事項】

該当事項はありません。

第4【その他の記載事項】

発行会社の名称、保証会社のロゴ、本社債の名称、売出人の名称が社債売届出目論見書の表紙に記載される。

さらに社債売届出目論見書の表紙裏に、次の記載がなされる。

マネックスグループ株式会社保証付 マネックスファイナンス株式会社2019年9月18日満期気温参照型クーポン付円建社債（以下「本社債」といいます。）の元本と利息の支払いはマネックスファイナンス株式会社（以下「発行会社」といいます。）の義務となっており、またかかる支払いを発行会社の親会社であるマネックスグループ株式会社（以下「保証会社」といいます。）が保証しています。したがって、発行会社又は保証会社の経営・財務状況の悪化等により、発行会社又は保証会社が本社債の元本又は利息又はその保証を支払わず又は支払うことができない場合には、投資家は損失を被り又は投資元本を割り込むことがあります。また、本社債の利率は、一定の観測期間中の観測地点における最高気温が25 以上の日数により変動します。

償還前の本社債の価格は、金利の変動、発行会社及び保証会社の経営・財務状況の変化及びそれらに関する外部評価の変化（例えば格付機関による格付の変更）等により上下しますので、本社債が時価評価の対象とされている場合には償還前においても評価損を被り、また、本社債を償還前に売却する場合には、投資元本を割り込むことがあります。

本社債についてその流通性や市場性は何ら保証されるものではなく、償還前の売却が困難な場合、そのことが売却価格に悪影響を及ぼすおそれがあります。

第二部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次		第1期	第2期
決算年月		2017年3月	2018年3月
営業収益	(千円)	-	209,467
経常損失()	(千円)	-	14,496
当期純損失()	(千円)	5	14,676
持分法を適用した場合の投資利益	(千円)	-	-
資本金	(千円)	10,000	50,000
発行済株式総数	(株)	200	1,000
純資産額	(千円)	9,994	35,317
総資産額	(千円)	10,000	20,164,163
1株当たり純資産額	(円)	49,971.00	35,317.96
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額)	(円)	- (-)	- (-)
1株当たり当期純損失金額 ()	(円)	29.00	56,116.84
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	(円)	-	-
自己資本比率	(%)	99.9	0.2
自己資本利益率	(%)	-	-
株価収益率	(倍)	-	-
配当性向	(%)	-	-
営業活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	-	19,598,051
投資活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	-	-
財務活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	10,000	20,146,860
現金及び現金同等物の期末残高	(千円)	10,000	558,808
従業員数	(人)	2	2

(注) 1. 当社は連結財務諸表を作成していませんので、連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移については記載していません。

2. 当社は2017年3月17日設立のため、第1期の事業年度は2017年3月17日から2017年3月31日までです。
3. 営業収益には消費税等は含まれていません。
4. 持分法を適用した場合の投資利益は、関連会社がないため記載していません。
5. 1株当たり配当額及び配当性向については、配当を実施していないため記載していません。
6. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していません。
7. 自己資本利益率については、当期純損失であるため記載していません。
8. 株価収益率については、当社株式は非上場であるため記載していません。

2【沿革】

2017年3月 マネックスファイナンス株式会社（当社）を設立

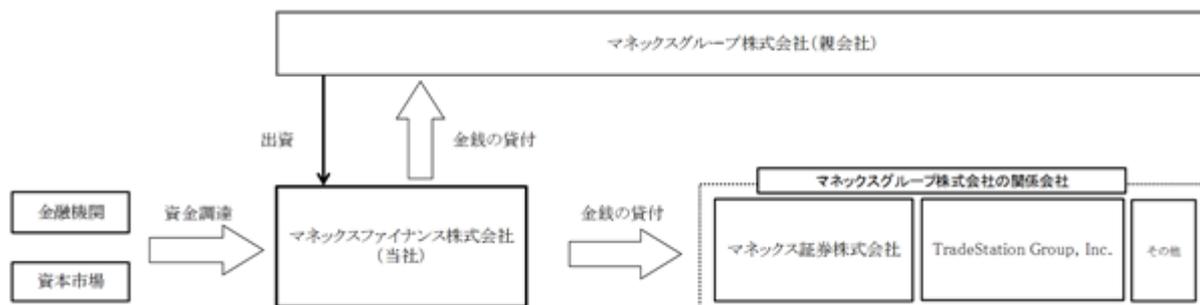
3【事業の内容】

当社は、マネックスグループ株式会社の100%子会社であり、主に金融機関からの借入及び社債の発行により資本市場から調達した資金を、マネックスグループ株式会社及びその関係会社（マネックス証券株式会社、TradeStation Group, Inc.等）における運転資金、設備資金及び投融資資金のための金銭の貸し付けを行っています。したがって、当社はマネックスグループ株式会社及びその関係会社向けの金銭の貸付を中心とした「金融事業」の単一セグメントです。

なお、事業の区分は「第5 経理の状況 1 財務諸表等 (1) 財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一です。

【事業系統図】

以上述べた事項を事業系統図として示すと、次のとおりです。



4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (千円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合 又は被所有割合 (%)	関係内容
(親会社) マネックスグループ株式会社(注)	東京都港区	10,393,550	持株会社	被所有 100.0	役員の兼任等

(注) 有価証券報告書を提出しています。

5【従業員の状況】

(1) 提出会社の状況

2018年6月30日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
2	45.4	1.1	-

(注) 1. 従業員は就業人員ですが、すべてマネックスグループ株式会社からの兼務出向者です。なお、給与についてはすべてマネックスグループ株式会社から支払われているため、平均年間給与は記載していません。

2. 当社の事業は「金融事業」の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しています。

(2) 労働組合の状況

該当事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、有価証券届出書提出日現在において当社が判断したものです。

(1) 経営方針及び経営戦略等

当社は、経営方針及び経営戦略等は特に定めていません。

(2) 経営環境

経営環境については、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要」に含めて記載しています。

(3) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当社は、マネックスグループ株式会社及びその関係会社への金銭の貸付と、金融機関からの借入及び社債の発行による資本市場からの資金調達の金利差が主な利益となります。したがって、両者の金利差の縮小は当社の業績に悪影響を与えることから最も大きなリスクであり対処すべき課題です。このため、金利の変動についてはモニタリングを行い、必要に応じて条件等を見直すことにより安定的に利益を計上することを目指します。

2【事業等のリスク】

有価証券届出書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項については、以下のようなものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券届出書提出日現在において当社が判断したものです。

(1) 信用リスク

当社は、金銭の貸付を中心とした事業を行っていることから、貸付先の信用リスクに晒されています。当社は、貸付先ごとの期日及び残高管理をするとともに、貸付先の信用状況を定期的に把握する体制をとっていますが、貸付先の業績悪化等により貸付先から十分に回収できない場合には当社の業績に影響を与える可能性があります。なお、貸付先は、親会社であるマネックスグループ株式会社及びその関係会社のみです。

(2) 市場関連リスク

当社は、米ドル建の貸付金を保有しているため為替変動リスクに晒されています。当社は、為替の変動リスクに対して、為替予約取引等を利用してヘッジしていますが、金利情勢によりヘッジコストが上昇し、当社の業績に影響を与える可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当事業年度（2017年4月1日から2018年3月31日まで）における当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

なお、当社は、親会社であるマネックスグループ株式会社及びその関係会社向けの金銭の貸付を中心とした「金融事業」の単一セグメントであるため、セグメント情報に関連付けた記載を行っていません。

また、当社は2017年3月17日設立のため、前事業年度は法人税、住民税及び事業税の支払のみであることから、前事業年度との対比については記載していません。

経営成績の状況

当事業年度の日本経済は、労働市場の改善継続や訪日外国人観光客によるインバウンド消費、世界経済が堅調に推移した恩恵もあり上場企業の業績は最高益を記録するなど概ね堅調に推移しました。一方、米国経済は、景気の牽引役である個人消費が好調に推移したことなどにより堅調に推移しました。労働市場の改善が継続するとともに、トランプ大統領が進めた大規模な減税の期待もあって徐々に物価上昇圧力が高まってきたとの判断から連邦準備制度理事会（FRB）は2017年6月、12月、2018年3月の連邦公開市場委員会（FOMC）でフェデラル・ファンド金利の誘導目標を引き上げました。

このような環境の下、当社は、当事業年度に貸付を開始し営業貸付金利息185,546千円を計上したことなどから、営業収益は209,467千円となりました。

販売費及び一般管理費は、支払手数料10,329千円を計上したことなどから、11,815千円となりました。

金融費用は、調達した借入金及び社債に対する支払利息や外貨建ての貸付金をヘッジするために締結している為替予約の評価損益を計上したことにより、185,654千円となりました。

営業外費用は、ユーロMTNプログラム（ ）に関する費用などを計上した結果、26,495千円となりました。

以上の結果、税引前当期純損失は14,496千円となり、当期純損失は14,676千円となりました。

ユーロMTN（ミディアム・ターム・ノート）プログラムとは、債券発行により資金調達を想定している発行体が、予めディーラーと発行に関する基本契約を締結し、起債関係者との関係を包括的に定めておくことにより、発行限度額内で個別の債券を随時発行できるようにするスキームです。

財政状態の状況

当事業年度の資産については、営業貸付金などを計上した結果、20,164,163千円となりました。また、負債については、短期借入金、短期社債などを計上した結果、20,128,845千円となりました。純資産については、当期純損失を計上したことにより減少したものの、第三者割当増資により資本金が増加した結果、35,317千円となりました。

キャッシュ・フロー

当事業年度末の現金及び現金同等物は558,808千円となりました。

当事業年度における各キャッシュ・フローの状況と要因は次のとおりです。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

当事業年度における営業活動により使用した資金は、19,598,051千円となりました。

貸付金の増加により19,347,935千円、利息の支払により49,118千円の資金を使用しました。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

当事業年度における財務活動により取得した資金は、20,146,860千円となりました。

短期借入金の増加により10,106,860千円、社債の発行により10,000,000千円、株式の発行により40,000千円の資金を取得しました。

生産、受注及び販売の実績

「生産、受注及び販売の実績」は該当する情報がないので記載していません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりです。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券届出書提出日現在において、当社が判断したものです。

重要な会計方針及び見積り

当社の財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成しています。

この財務諸表の作成にあたり重要な見積りはありません。

当事業年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当事業年度は、当社はマネックスグループ株式会社のファイナンス子会社として、グループ会社の資金調達と供給、グループ会社間の余剰資金を円滑に必要な会社へ供給する会社として当期より営業をスタートしました。

2017年6月にマネックスグループ株式会社からTradeStation Group, Inc.へ貸し付けていた75百万USDの貸付金を当社が譲り受けてその関係会社へ初めての貸付を開始しました。

2018年1月に初の社債発行を実施、100億円を調達し、マネックスグループ株式会社へ貸付を開始しています。

調達・供給ともに、精力的な活動を行ってまいりましたが、営業活動初年度としてユーロMTNプログラムの設定と格付け費用の初期費用負担が大きく費用を吸収するだけの収益を上げることができず、当期純損失となりました。

翌事業年度、安定的に利益を計上することを目指して事業運営に取り組んでまいります。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

最近事業年度において、設備投資、重要な設備の除却、売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

当社の主要な設備は次のとおりです。

2018年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額（千円）				従業員数 (人)
			建物	器具備品	ソフトウェア	合計	
本社（東京都港区）	-	本社設備	-	-	-	-	2

（注）1．当社は「金融事業」の単一セグメントであるため、セグメント情報に関連付けた記載を行っていません。

2．本社設備はすべてマネックスグループ株式会社の設備を利用しています。

3【設備の新設、除却等の計画】

重要な設備の新設、除却等の計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	100,000
計	100,000

【発行済株式】

種類	発行数（株）	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	1,000	非上場	当社は単元株制度は採用していません。
計	1,000	-	-

(注) 当社の普通株式は、取締役会の承認がなければ譲渡することができない譲渡制限株式です。

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数 増減数（株）	発行済株式総 数残高（株）	資本金増減額 （千円）	資本金残高 （千円）	資本準備金増 減額（千円）	資本準備金残 高（千円）
2017年3月17日 (注)1	200	200	10,000	10,000	-	-
2018年3月27日 (注)2	800	1,000	40,000	50,000	-	-

(注) 1. 会社設立によるものです。

2. 有償第三者割当増資 800株
発行価格 50,000円
資本組入額 50,000円
割当先 マネックスグループ株式会社

(4) 【所有者別状況】

2018年6月30日現在

区分	株式の状況							単元未満株式の状況 (株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	-	-	1	-	-	-	1	-
所有株式数 (株)	-	-	-	1,000	-	-	-	1,000	-
所有株式数の割合(%)	-	-	-	100.00	-	-	-	100.00	-

(注) 当社は単元株制度は採用していません。

(5) 【大株主の状況】

2018年6月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式(自己株式を除く。)の 総数に対する所有株式数の割合 (%)
マネックスグループ株式会社	東京都港区赤坂一丁目12番32号	1,000	100.00
計	-	1,000	100.00

(6) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2018年6月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	-	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 1,000	1,000	-
単元未満株式	-	-	-
発行済株式総数	1,000	-	-
総株主の議決権	-	1,000	-

(注) 当社は単元株制度は採用していません。

【自己株式等】

該当事項はありません。

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 該当事項はありません。

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

該当事項はありません。

3【配当政策】

当社は、必要な内部留保を確保しつつ、株主に対する適切な利益配分を実施していくことを基本的な方針としています。内部留保資金については、借入金の返済及び社債の償還や事業拡大のための新規貸付等に使用する予定です。また、当社は、会社法第454条第5項の規定に基づき、取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として中間配当を行うことができる旨を定款に定めており、年2回、中間配当及び期末配当として剰余金の配当を行うことを基本的な方針としています。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会です。

なお、最近事業年度の配当については、当期純利益を計上していないため実施していません。

4【株価の推移】

当社株式は非上場であるため、該当事項はありません。

5【役員の状況】

男性4名 女性0名（役員のうち女性の比率0.0%）

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役	-	勝股 春美	1960年1月9日	1983年4月 日興証券株式会社入社 2005年2月 日興ビーンズ証券株式会社（現マネックス証券株式会社）出向 2009年10月 マネックス証券株式会社入社 2014年6月 同 監査役 2017年4月 当社取締役 2017年7月 マネックス証券株式会社執行役員（現任） 2018年4月 当社代表取締役（現任）	(注)1	-
取締役	-	蓮尾 聡	1970年3月14日	1993年4月 株式会社日本長期信用銀行入行 1998年11月 長銀ウォーバーグ証券会社入社 2004年3月 三菱証券株式会社入社 2005年5月 マネックス・ビーンズ・ホールディングス株式会社（現マネックスグループ株式会社）入社 2007年10月 マネックス証券株式会社取締役 2010年10月 マネックスグループ株式会社執行役員 2010年10月 マネックス・ビジネス・インキュベーション株式会社（現マネックスベンチャーズ株式会社）代表取締役 2015年6月 マネックス証券株式会社執行役員 2015年6月 マネックスグループ株式会社常務執行役員 2016年1月 マネックス・セゾン・バンガード投資顧問株式会社代表取締役 2016年4月 マネックスグループ株式会社執行役員（現任） 2017年4月 当社代表取締役 2017年10月 マネックス証券株式会社常務執行役員 2018年1月 マネックス証券株式会社取締役（現任） 2018年4月 当社取締役（現任） 2018年4月 TradeStation Group, Inc. 取締役（現任）	(注)1	-

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	-	相川 浩	1974年7月30日	1997年4月 日本アジア投資株式会社入社 2009年2月 マネックスグループ株式会社入社 2009年6月 マネックス・ビジネス・インキュベーション株式会社(現マネックスベンチャーズ株式会社)取締役 2009年8月 WRハンプレクトジャパン株式会社(現マネックス証券株式会社)取締役 2014年6月 アストマックス投資に投資顧問株式会社取締役 2015年8月 日本投資顧問株式会社(現マネックス・セゾン・バンガード投資顧問株式会社)代表取締役社長 2018年1月 マネックスオルタナティブズ株式会社代表取締役 2018年1月 マネックスベンチャーズ株式会社代表取締役 2018年4月 当社取締役(現任)	(注)1	-
監査役	-	田村 清	1955年8月8日	1980年4月 日興証券株式会社入社 2000年5月 日興ビーンズ証券株式会社(現マネックス証券株式会社)入社 2005年5月 マネックス証券株式会社執行役員 2007年4月 同 取締役 2010年1月 同 執行役員 2011年6月 同 常務執行役員 2012年6月 同 取締役常務執行役員 2017年4月 同 監査役(現任) 2017年4月 当社監査役(現任) 2017年12月 マネックスクリプトバンク株式会社監査役	(注)2	-
計						-

(注)1. 取締役の任期は、2019年3月期にかかる定時株主総会終結の時までです。

2. 監査役の任期は、2021年3月期にかかる定時株主総会終結の時までです。

6【コーポレート・ガバナンスの状況等】

（１）【コーポレート・ガバナンスの状況】

企業統治の体制

イ．コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、親会社であるマネックスグループ株式会社の一員として、グループの企業価値を持続的に向上させるうえで、実効性の高いコーポレート・ガバナンスを実現することが重要であると考えています。

これを実現するために、下記「ロ．会社機関の基本説明」に記載のとおり、監査役設置会社の形態を採用し、下記「ハ．企業統治に関する事項」に記載のとおり、マネックスグループ株式会社から牽制を働かせる体制を整えています。

ロ．会社機関の基本説明

取締役会は、3名で構成されています。取締役会は代表取締役を議長とし、定時取締役会は3ヵ月に1回以上開催し、その他必要に応じて臨時取締役会を開催しています。

また、当社は、企業規模、事業内容等を勘案し、監査役による監査体制が経営監視機能として有効であるとの理由から監査役制度を採用しており、監査役は1名です。

ハ．企業統治に関する事項 - 内部統制システムの整備の状況、リスク管理体制の整備の状況及び子会社の業務の適正を確保するための体制の整備状況

（a）内部統制システムの整備の状況

適正な業務の遂行を確保するために、内部統制システムを整備し、その充実及び強化に努めることが重要であると認識しています。

当社は、重要な業務執行に関わる事項など取締役会において決議されるべき範囲を明確にするために「取締役会規則」を定め、代表取締役を含む各役職員が決裁できる範囲を明確にするために「決裁権限規程」を定めています。また、各組織の業務分掌を明確にするために「業務分掌規程」を定めています。

当社の役職員は、当社において定められた「取締役会規則」、「決裁権限規程」及び「業務分掌規程」に従って経営を執行し、あるいは各自の業務を遂行しています。

また、当社において「内部統制システム構築基本方針」及びこれに基づき制定された「内部統制規程」を整備しており、当社の役職員は、当該規則に基づき経営を執行し業務を遂行しています。

当社において定められている内部統制システムの内容は次のとおりです。

（ ）取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

・企業倫理の確立と法令遵守体制の整備

取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制の基礎として、遵守すべき企業倫理にかかる基本的な考え方や行動指針を定めることとしています。当社は、マネックスグループ株式会社の定める「企業倫理・コンプライアンスに関する行動指針」に基づき、マネックスグループ株式会社からの兼務出向者である当社役職員についても当該規程に従うことにより、企業倫理の確立と法令遵守体制を整備しています。

・内部通報制度の整備

取締役及び使用人の行為等についての早期発見及び是正を図ることを目的として、通報受領者（社外に指定する弁護士）に直接情報提供を行うマネックスグループ株式会社の内部通報制度を利用しています。

（ ）取締役の職務の執行にかかる情報の保存及び管理に関する体制

職務の執行にかかる情報については、文書その他の情報の取り扱いにかかる規程に従い適切に保存及び管理を行うこととしています。これに基づき、「文書管理規程」を定め、職務の執行にかかる情報の保存及び管理に関する体制を整備しています。

（ ）損失の危険の管理に関する規程その他の体制

当社の損失の危険の管理に関し、リスク分類毎に各責任部門がリスクの管理を行い、各部門におけるリスクの管理状況を定期的に取り締めに報告し、取締役会において確認することによりリスクの管理を行うこととしています。これに基づき、下記「ハ．企業統治に関する事項（b）リスク管理体制の整備の状況」に記載のとおり、当社はリスク管理体制を整備しています。

()取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

当社は、その規模・業務内容に照らし、業務執行の効率化・迅速化に適した機関設計を行うこととしています。また、当社はその自律性を尊重しつつ、業務分掌及び決裁権限にかかる規程を定めることとしています。これに基づき、上記「ロ．会社機関の基本説明」に記載のとおり、監査役制度を採用し、また、上記「ハ．企業統治に関する事項 (a) 内部統制システムの整備の状況」に記載のとおり、当社は業務分掌及び決裁権限にかかる規程を定めています。

()反社会的勢力との関係遮断

反社会的勢力との関係の遮断が適切に行われるために必要な指導を行っています。

(b) リスク管理体制の整備の状況

当社では、リスク管理の基本方針及び体制を「リスク管理規程」において定めています。

当該規程に基づいて、当社の直面するリスクを市場関連リスク、信用リスクその他のリスクに分類した上で、分類されたリスク毎に管理部が管理を行い、リスクの管理状況を必要に応じて取締役会に報告し、取締役会において確認することによりリスクの管理を行っています。

(c) 子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

該当事項はありません。

内部監査、監査役監査及び会計監査の状況

イ．内部監査

当社には内部監査組織はありませんが、親会社であるマネックスグループ株式会社に内部監査業務を委託しており、同社の内部監査室(2名)が内部監査を実施する体制を整備し、内部監査を実施しています。

ロ．監査役による監査

監査役は、取締役又は職員からその職務の執行状況について報告を受け、説明を求め、監査を実施しています。

ハ．会計監査の状況

金融商品取引法監査について有限責任 あずさ監査法人と監査契約を締結しています。

最近事業年度において業務を執行した公認会計士の氏名、監査業務に係る補助者の構成は以下のとおりです。

指定有限責任社員・業務執行社員 公認会計士 林 秀行

指定有限責任社員・業務執行社員 公認会計士 菅谷圭子

(注) いずれの指定有限責任社員・業務執行社員も継続監査年数は7年以内です。

(監査業務に係る補助者の構成)

公認会計士 3名、米国公認会計士 1名、その他 2名

ニ．内部監査、監査役による監査及び会計監査の相互連携

マネックスグループ株式会社の内部監査室は、内部監査の計画、実施段階において当社の監査役との連携を図る他、内部監査の結果について当社の監査役に報告するとともに、当社の会計監査人と内部監査及び会計監査の実施及び結果について情報交換を行い、連携強化に努めています。

当社の監査役は、当社の会計監査人より会計監査結果等の報告を受けるとともに、情報交換を行い連携強化に努めており、また、会計監査結果報告等の報告についてはマネックスグループ株式会社の内部監査室にも共有することにより、三者間の連携強化に努めています。

社外取締役及び社外監査役と提出会社との人的関係、資本的關係又は取引關係その他の利害關係

当社は、マネックスグループ株式会社からの経営監視機能が十分に整っていると判断しているため、社外取締役及び社外監査役を選任していません。なお、マネックスグループ株式会社は指名委員会等設置会社であり、取締役会の三分の二は社外取締役で構成されています。

責任限定契約の内容の概要

当社は、会社法第427条第1項の規定に基づき、取締役(業務執行取締役等であるものを除く。)及び監査役との間で、当該取締役及び監査役の会社法第423条第1項の責任につき、善意でかつ重大な過失がない場合は、法令の定める額を限度として責任を負担する契約を締結することができる旨を定款に定めていますが、当社と、取締役及び監査役との間で、当該責任限定契約を締結していません。

役員の報酬等

当社の役員報酬については全員無報酬です。

取締役の定数

当社の取締役は5名以内とする旨定款に定めています。

取締役の選任の決議要件

当社の取締役は、株主総会において選任し、その決議は総株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数の決議によって行い、累積投票によらない旨を定款で定めています。

取締役会で決議することができる株主総会決議事項

イ．取締役及び監査役の責任免除

当社は、取締役及び監査役が期待される役割を十分に発揮できることを目的とし、会社法第426条第1項の規定に基づき、取締役(取締役であった者を含む。)及び監査役(監査役であった者を含む。)の会社法第423条第1項の責任につき、善意でかつ重大な過失がない場合は、取締役会の決議によって、法令の定める限度額の範囲内で、その責任を免除することができる旨を定款に定めています。

ロ．中間配当

当社は、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めています。これは、株主への機動的な利益還元を可能にするためです。

株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めています。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものです。

(2) 【監査報酬の内容等】

【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	最近事業年度の前事業年度		最近事業年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	600	-	2,700	-
計	600	-	2,700	-

【その他重要な報酬の内容】

(最近事業年度の前事業年度)

該当事項はありません。

(最近事業年度)

該当事項はありません。

【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(最近事業年度の前事業年度)

該当事項はありません。

(最近事業年度)

該当事項はありません。

【監査報酬の決定方針】

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針としては、監査計画に基づき所要工数及び金額の妥当性を検証した上で決定しています。

第5【経理の状況】

1．財務諸表の作成方法について

当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しています。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、事業年度（2017年4月1日から2018年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人による監査を受けています。

3．連結財務諸表について

当社は子会社がありませんので、連結財務諸表を作成していません。

4．財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っています。会計基準等の内容を適切に把握し、財務諸表等の適正性を確保できる体制を整備するため、会計基準等の変更等に関する情報を随時入手している他、外部セミナーなどに積極的に参加しています。

1【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	-	558,808
営業貸付金	-	2 14,347,935
関係会社短期貸付金	-	1 5,000,000
前払費用	-	14,646
未収収益	-	221,202
為替予約	-	16,331
預け金	10,000	-
その他	-	0
流動資産合計	10,000	20,158,923
繰延資産		
社債発行費	-	5,240
繰延資産合計	-	5,240
資産合計	10,000	20,164,163
負債の部		
流動負債		
短期借入金	-	2, 3 10,106,860
短期社債	-	10,000,000
未払費用	-	21,062
未払法人税等	5	180
その他	-	743
流動負債合計	5	20,128,845
負債合計	5	20,128,845
純資産の部		
株主資本		
資本金	10,000	50,000
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	5	14,682
利益剰余金合計	5	14,682
株主資本合計	9,994	35,317
純資産合計	9,994	35,317
負債純資産合計	10,000	20,164,163

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年3月17日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
営業収益		
業務受託収入	-	16,242
営業貸付金利息	-	185,546
関係会社貸付金利息	-	7,678
営業収益合計	-	209,467
営業費用		
販売費及び一般管理費	-	111,815
金融費用	-	185,654
営業費用合計	-	197,470
営業利益	-	11,997
営業外収益	-	1
営業外費用	-	226,495
経常損失()	-	14,496
税引前当期純損失()	-	14,496
法人税、住民税及び事業税	5	180
法人税等合計	5	180
当期純損失()	5	14,676

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年3月17日 至 2017年3月31日)

(単位:千円)

	株主資本			純資産合計
	資本金	利益剰余金	株主資本合計	
		その他利益剰余金		
		繰越利益剰余金		
当期首残高	-	-	-	-
当期変動額				
新株の発行	10,000		10,000	10,000
当期純損失()		5	5	5
当期変動額合計	10,000	5	9,994	9,994
当期末残高	10,000	5	9,994	9,994

当事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位:千円)

	株主資本			純資産合計
	資本金	利益剰余金	株主資本合計	
		その他利益剰余金		
		繰越利益剰余金		
当期首残高	10,000	5	9,994	9,994
当期変動額				
新株の発行	40,000		40,000	40,000
当期純損失()		14,676	14,676	14,676
当期変動額合計	40,000	14,676	25,323	25,323
当期末残高	50,000	14,682	35,317	35,317

【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年3月17日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純損失()	-	14,496
貸付金の増減額(は増加)	-	19,347,935
金融収益及び金融費用	-	131,501
デリバティブ評価損益(は益)	-	16,331
その他	-	38,664
小計	-	19,548,928
利息及び配当金の受取額	-	1
利息の支払額	-	49,118
法人税等の支払額	-	5
営業活動によるキャッシュ・フロー	-	19,598,051
投資活動によるキャッシュ・フロー		
投資活動によるキャッシュ・フロー	-	-
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(は減少)	-	10,106,860
社債の発行による収入	-	10,000,000
株式の発行による収入	10,000	40,000
財務活動によるキャッシュ・フロー	10,000	20,146,860
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	10,000	548,808
現金及び現金同等物の期首残高	-	10,000
現金及び現金同等物の期末残高	10,000	558,808

【注記事項】

（重要な会計方針）

1．デリバティブ等の評価基準及び評価方法
時価法を採用しています。

2．繰延資産の処理方法
社債発行費
社債償還期間にわたり、定額法により償却しています。

3．貸倒引当金の計上基準
債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しています。
なお、前事業年度及び当事業年度においては、貸倒実績はなく、また貸倒懸念債権等もないことから、貸倒引当金を計上していません。

4．キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクシカ負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっています。

5．消費税等の会計処理
消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっています。

(貸借対照表関係)

1. 関係会社に対し金銭消費貸借契約を締結しております。これに基づく貸付及び借入未実行額は次のとおりです。

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
金銭消費貸借の総額	-	50,000,000千円
貸出実行残高	-	5,000,000
差引計	-	45,000,000

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
金銭消費貸借の総額	-	10,000,000千円
借入実行残高	-	-
差引計	-	10,000,000

2. 金銭消費貸借契約を締結しております。これに基づく貸付及び借入未実行額は次のとおりです。

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
金銭消費貸借の総額	-	28,599,175千円
貸出実行残高	-	14,347,935
差引計	-	14,251,240

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
金銭消費貸借の総額	-	10,000,000千円
借入実行残高	-	6,376,860
差引計	-	3,623,140

3. 借入コミットメント契約等を締結しております。これらの契約に基づく借入未実行残高は次のとおりです。

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
借入コミットメント契約の総額	-	3,730,000千円
借入実行残高	-	3,730,000
差引計	-	-

4. 運転資金の効率的な調達を行うため、当座貸越契約等を締結しております。これらの契約に基づく借入未実行残高は次のとおりです。

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
当座貸越契約等	-	3,000,000千円
貸出実行残高	-	-
差引計	-	3,000,000

(損益計算書関係)

1.販売費及び一般管理費の主な内訳は次のとおりです。

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
支払手数料	-	10,329千円

2.営業外費用の主な内訳は次のとおりです。

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
社債発行費償却	-	5,000千円
社債発行関連費用	-	21,495千円

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 2017年3月17日 至 2017年3月31日)

1.発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首 株式数(株)	当事業年度増加 株式数(株)	当事業年度減少 株式数(株)	当事業年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式(注)	-	200	-	200
合計	-	200	-	200
自己株式				
普通株式	-	-	-	-
合計	-	-	-	-

(注) 普通株式の発行済株式数の増加200株は、当社設立に伴う新株の発行による増加です。

2.配当に関する事項

該当事項はありません。

当事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1.発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首 株式数(株)	当事業年度増加 株式数(株)	当事業年度減少 株式数(株)	当事業年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式(注)	200	800	-	1,000
合計	200	800	-	1,000
自己株式				
普通株式	-	-	-	-
合計	-	-	-	-

(注) 発行済株式における普通株式の増加800株は、第三者割当増資によるものです。

2.配当に関する事項

該当事項はありません。

（キャッシュ・フロー計算書関係）

現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前事業年度 (自 2017年3月17日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
現金及び預金勘定	- 千円	558,808千円
預け金	10,000	-
現金及び現金同等物	10,000	558,808

（金融商品関係）

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、親会社であるマネックスグループ株式会社及びその関係会社向けの金銭の貸付を中心とした「金融事業」を行っていることから、資金運用は主にマネックスグループ株式会社及びその関係会社向けの債権に限定され、資金調達は社債や借入金により調達する方針です。また、デリバティブは、リスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針です。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である営業貸付金及び関係会社貸付金は、貸付先の信用リスクに晒されております。また、外貨建ての営業債権は、為替変動リスクに晒されておりますが、為替予約等を利用してヘッジしております。銀行預金については信用リスクに晒されております。

営業債務である短期借入金及び短期社債は、営業貸付金等の提供に必要な資金の調達を目的としたものであります。

デリバティブ取引については、外貨建ての営業債権の為替変動リスクを回避する目的で為替予約等を行っております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク

貸付金については、貸付先ごとの期日及び残高管理をするとともに、貸付先の信用状況を定期的に把握する体制をとっています。

市場リスク

外貨建ての債権については、為替の変動リスクに対して、原則として先物為替予約を利用してリスクをヘッジしています。

流動性リスク

当社は、適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しています。

2. 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりです。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれていません（（注）2. 参照）。

前事業年度（2017年3月31日）

	貸借対照表計上額 （千円）	時価（千円）	差額（千円）
(1) 預け金	10,000	10,000	-
資産計	10,000	10,000	-

当事業年度（2018年3月31日）

	貸借対照表計上額 （千円）	時価（千円）	差額（千円）
(1) 現金及び預金	558,808	558,808	-
(2) 営業貸付金	14,347,935	14,347,935	-
(3) 関係会社短期貸付金	5,000,000	5,000,000	-
資産計	19,906,743	19,906,743	-
(1) 短期借入金	10,106,860	10,106,860	-
(2) 短期社債	10,000,000	10,000,000	-
負債計	20,106,860	20,106,860	-
デリバティブ取引	16,331	16,331	-

（注）1. 金融商品の時価の算定方法及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(3) 関係会社貸付金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっています。

(2) 営業貸付金

営業貸付金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸付先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっています。一方固定金利によるものは、将来キャッシュ・フローの割引現在価値に基づく方法等により算定しています。

負 債

(1) 短期借入金、(2) 短期社債

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっています。

デリバティブ

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照ください。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

該当事項はありません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の決算日後の償還予定額
前事業年度(2017年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
預け金	10,000	-	-	-
合計	10,000	-	-	-

当事業年度(2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	558,808	-	-	-
営業貸付金	9,033,885	5,314,050	-	-
関係会社短期貸付金	5,000,000	-	-	-
合計	14,592,693	5,314,050	-	-

4. 社債、長期借入金及びその他の有利子負債の決算日後の返済予定額
前事業年度(2017年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	10,106,860	-	-	-	-	-
短期社債	10,000,000	-	-	-	-	-
合計	20,106,860	-	-	-	-	-

（デリバティブ取引関係）

1．ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1)通貨関連

前事業年度

該当事項はありません。

当事業年度（2018年3月31日）

区分	取引の種類	契約額等 （千円）	契約額等の うち1年超 （千円）	時価 （千円）	評価損益 （千円）
市場取引以外の 取引	為替予約取引 売建 米ドル	7,954,481	-	16,331	16,331
合計		7,954,481	-	16,331	16,331

（注）時価算定の方法

将来キャッシュ・フローの割引現在価値に基づく方法等により算定しています。

（税効果会計関係）

1．繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 （平成29年3月31日）	当事業年度 （平成30年3月31日）
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金	- 千円	5,015千円
繰延税金資産小計	-	5,015
評価性引当額	-	5,015
繰延税金資産合計	-	-
繰延税金資産の純額	-	-

2．法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

前事業年度及び当事業年度においては、税引前当期純損失であるため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社は、親会社であるマネックスグループ株式会社及びその関係会社向けの金銭の貸付を中心とした「金融事業」の単一セグメントであり重要性が乏しいため、記載を省略しています。

【関連情報】

前事業年度(2017年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報
該当事項はありません。

2. 地域ごとの情報
該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報
該当事項はありません。

当事業年度(2018年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報
当社のサービスは「金融事業」の単一事業であるため、記載を省略しています。

2. 地域ごとの情報
(1)営業収益

(単位:千円)

日本	米国	合計
23,921	185,546	209,467

(注) 営業収益は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しています。

(2)有形固定資産
該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位:千円)

顧客の氏名又は名称	営業収益
TradeStation Group, Inc.	185,546
マネックスグループ株式会社	23,921

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却額に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等

前事業年度(自 2017年3月17日 至 2017年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(千円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(千円)	科目	期末残高(千円)
親会社	マネックスグループ株式会社	東京都港区	10,393,550	持株会社	(被所有)直接 100%	役員の兼任	新株の発行(注)1	10,000	-	-
							資金の一時的な預け入れ(注)1	10,000	預け金	10,000

当事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(千円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(千円)	科目	期末残高(千円)
親会社	マネックスグループ株式会社	東京都港区	10,393,550	持株会社	(被所有)直接 100%	役務の提供 資金の貸借 役員の兼任 債務保証	新株の発行(注)2	40,000	-	-
							役務の提供(注)3	16,242	未収収益	15,229
							資金の貸付(注)4	5,000,000	関係会社短期貸付金	5,000,000
							利息の受取(注)4	7,678	未収収益	7,678
							資金の借入(注)4	13,945,000		
							資金の返済(注)4	13,702,850	-	-
							利息の支払(注)4	38,579		
							貸付金の譲受	8,438,622	-	-
兄弟会社	マネックス証券株式会社	東京都港区	12,200,000	金融商品取引業	なし	資金の貸借 役員の兼任	資金の借入(注)4	6,376,860	短期借入金	6,376,860
							利息の支払(注)4	7,972	未払費用	7,972
兄弟会社	Trade Station Group, Inc.	米国フロリダ州	515千米ドル	持株会社	なし	資金の貸借 役員の兼任	資金の貸付(注)4	6,376,860	営業貸付金	14,347,935
							利息の受取(注)4	185,546	未収収益	198,293

(注)1. 当社設立にあたり、資本金の払込を受け、設立発起人名義の銀行口座に一時的に預け入れているものです。

2. 第三者増資により発行株式を引き受けたものです。

3. 役務の提供については、対価としての妥当性を勘案し、協議の上、合理的に決定されております。なお、取引金額には消費税等は含まれておりません。

4. 資金の貸付については、市場金利を勘案して決定しております。なお、担保は受け入れておりません。

5. 金融機関からの借入れにつき、債務保証を受けております。なお、債務保証の料率については、市場保証料率を勘案して合理的に決定しております。

6. 社債の発行につき、債務保証を受けております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

マネックスグループ株式会社(東京証券取引所に上場)

(2) 重要な関連会社の要約財務諸表

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前事業年度 (自 2017年3月17日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
1株当たり純資産額	49,971.00円	35,317.96円
1株当たり当期純損失金額()	29.00円	56,116.84円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していません。

2. 1株当たり当期純損失金額の算定上の基礎は、以下のとおりです。

	前事業年度 (自 2017年3月17日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
当期純損失金額()(千円)	5	14,676
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る当期純損失金額()(千円)	5	14,676
普通株式の期中平均株式数(株)	200	261

(重要な後発事象)

当社は、2018年6月15日の取締役会において、無担保社債を発行することを決議しました。その内容は次のとおりです。

個人向けマネックス債(1年債)

- (1) 銘柄
マネックスグループ株式会社保証付 マネックスファイナンス株式会社2019年7月26日満期円建社債
- (2) 発行価格
額面100円につき金100円
- (3) 発行総額
5,000百万円
- (4) 利率
0.35%
- (5) 償還方法
満期償還又は買入消却
- (6) 償還期限
2019年7月26日
- (7) 発行の時期
2018年7月25日
- (8) 資金の用途
運転資金及び投融資資金

個人向けマネックス債(3年債)

- (1) 銘柄
マネックスグループ株式会社保証付 マネックスファイナンス株式会社2021年7月26日満期円建社債
- (2) 発行価格
額面100円につき金100円
- (3) 発行総額
5,000百万円
- (4) 利率
0.58%
- (5) 償還方法
満期償還又は買入消却
- (6) 償還期限
2021年7月26日
- (7) 発行の時期
2018年7月25日
- (8) 資金の用途
運転資金及び投融資資金

【附属明細表】

【有価証券明細表】

該当事項はありません。

【有形固定資産等明細表】

該当事項はありません。

【社債明細表】

銘柄	発行年月日	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	利率(%)	担保	償還期限
マネックスグループ株式会社 保証付 マネックスファイナ ンス株式会社2018年7月9日 満期円建社債	2018年1月9日	-	10,000,000 (10,000,000)	0.20	なし	2018年7月9日
合計	-	-	10,000,000 (10,000,000)	-	-	-

(注) 1. ()内書きは、1年以内の償還予定額であります。

2. 決算日後5年間の償還予定額は以下のとおりであります。

1年以内 (千円)	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
10,000,000	-	-	-	-

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	-	10,106,860	1.5	-
合計	-	10,106,860	-	-

(注) 平均利率について、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

【引当金明細表】

該当事項はありません。

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2)【主な資産及び負債の内容】

流動資産

イ.現金及び預金

区分	金額(千円)
現金	-
預金	
普通預金	558,808
小計	558,808
合計	558,808

ロ.営業貸付金

相手先	金額(千円)
TradeStation Group, Inc.	14,347,935

ハ.関係会社短期貸付金

相手先	金額(千円)
マネックスグループ株式会社	5,000,000

(3)【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	毎事業年度終了後3ヶ月以内
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	-
株式の名義書換え	
取扱場所	東京都港区赤坂一丁目12番32号 マネックスファイナンス株式会社
株主名簿管理人	-
取次所	-
名義書換手数料	無料
新券交付手数料	印紙税相当額
単元未満株の買取り	
取扱場所	-
株主名簿管理人	-
取次所	-
買取手数料	-
公告掲載方法	電子公告によってこれを行う。 http://www.monexgroup.jp/ やむを得ない事由により、電子公告によることができない場合は、官報に掲載する方法により行う。
株主に対する特典	該当事項はありません。
株式の譲渡制限	当社の株式は、取締役会の承認がなければ譲渡することができない。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は上場会社ではありませんので、金融商品取引法第24条の7第1項の適用がありません。

2【その他の参考情報】

最近事業年度の開始日から有価証券届出書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書
2018年6月25日 関東財務局長に提出
- (2) 臨時報告書
2018年6月7日 関東財務局長に提出
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号（代表取締役の異動）の規定に基づく臨時報告書です。
- (3) 有価証券届出書（一般募集による社債の売出）及びその添付書類
2017年12月4日 関東財務局長に提出
2018年6月25日 関東財務局長に提出
- (4) 有価証券届出書の訂正届出書
2018年7月5日 関東財務局長に提出
2018年6月25日提出の有価証券届出書に係る訂正届出書です。

第三部【提出会社の保証会社等の情報】

第1【保証会社情報】

1【保証の対象となっている社債】

第一部「証券情報」に掲げた「マネックスグループ株式会社保証付 マネックスファイナンス株式会社2019年9月18日満期気温参照型クーポン付円建社債」

社債の名称	マネックスグループ株式会社保証付 マネックスファイナンス株式会社2019年9月18日満期気温参照型クーポン付円建社債
発行年月	2018年9月14日
券面総額又は振替社債の総額	2,000百万円
償還額	該当事項はありません。
提出会社の最近事業年度末日の未償還額	該当事項はありません。
上場金融商品取引所又は登録認可金融商品取引業協会名	該当事項はありません。

2【継続開示会社たる保証会社に関する事項】

(1)【保証会社が提出した書類】

当該届出に係る社債の保証をしている継続開示会社であるマネックスグループ株式会社に関する事項は以下のとおりです。

【有価証券報告書及びその添付書類】

事業年度（第14期）（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）2018年6月25日関東財務局長に提出

【四半期報告書又は半期報告書】

事業年度（第15期第1四半期）（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）2018年8月3日関東財務局長に提出

【臨時報告書】

上記の有価証券報告書提出後、本有価証券届出書提出日（2018年8月24日）までに、金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2の規定に基づく臨時報告書を2018年6月25日に関東財務局長に提出

【訂正報告書】

訂正報告書（上記有価証券報告書の訂正報告書）を2018年7月4日に関東財務局長に提出

(2)【上記書類を縦覧に供している場所】

マネックスグループ株式会社 本店
（東京都港区赤坂一丁目12番32号）
株式会社東京証券取引所
（東京都中央区日本橋兜町2番1号）

3【継続開示会社に該当しない保証会社に関する事項】

該当事項はありません。

第2【保証会社以外の会社の情報】

該当事項はありません。

第3【指数等の情報】

該当事項はありません。

第四部【特別情報】

第1【最近の財務諸表】

該当事項はありません。

第2【保証会社及び連動子会社の最近の財務諸表又は財務書類】

保証会社であるマネックスグループ株式会社は、継続開示会社であるため、記載を省略しています。

独立監査人の監査報告書

2018年6月23日

マネックスファイナンス株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 林 秀行 印
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 菅谷 圭子 印
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているマネックスファイナンス株式会社の2017年4月1日から2018年3月31日までの第2期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、マネックスファイナンス株式会社の2018年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券届出書提出会社）が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。